

日本 ESD 学会



UNITED NATIONS
UNIVERSITY

UNU-IAS

「SDGs と ESD」特別企画シンポジウム
ー ESD の実践と研究の有機的連携にむけてー



Education
2030

2018 年 3 月 3 日
(13:30-18:00、開場 12:30)

主催: 日本 ESD 学会、国連大学サステイナビリティ高等研究所

後援: 文部科学省、環境省、

ESD 活動支援センター、(独)国際協力機構(JICA)

協力: 地球環境パートナーシップオフィス(GEOC)

会場: 国連大学 ウ・タント国際会議場

《謝辞》

本特別企画シンポジウムの開催においては、日本 ESD 学会と国連大学サステナビリティ高等研究所による企画・運営のもと、多くの関係者：日本 ESD 学会会員、ESD 日本ユース、学校関係者、NPO/NGOs、大学関係者、学生、企業、環境パートナーシップオフィス(GEOC/EPO)、ESD 活動支援センター、JICA 地球ひろば、自治体・教育委員会、政府機関、国際機関のご協力をいただきました。この場を借りて御礼を申し上げます。

《協力企業・団体》

本特別企画シンポジウムでは、下記の協力企業・団体から、教材等の提供等がありました。

ESD/SDGs の取組拡充にむけた連携・協働をともに行いたいとの思いが込められております。

SDGs ピン・バッジ

- ◆日能研
- ◆特定非営利活動法人持続可能な開発のための教育推進会議(ESD-J)
- ◆公益社団法人日本環境教育フォーラム(JEEF)
- ◆公益社団法人ガールスカウト日本連盟(GSJ)
- ◆一般社団法人学習評価研究所(C.S.I.)



SDGs シール

◆株式会社クレアン

(<http://www.cre-en.jp/>)

CSR コンサルティングと CSR 報告書の企画制作の支援をしています。私たちは企業だけでなく市民、政府が協力をし、進んで社会責任を果たす社会環境を作っていくために、本業を通じて挑戦を続けます。

CSR コンサルティングのクレアン。



SDGs メモ帳(環境配慮型印刷)

◆株式会社大川印刷

(<https://www.ohkawa-inc.co.jp/>)

情報産業の中核として信頼に応える技術力と喜びを分かち合える「ものづくり」の実現。



二次会懇親会(ニッカ・ブレンダーズバー)チャージ料無料

※本プログラム冊子の提示が条件です。

◆アサヒグループホールディングス(株)

「自然の恵み」を用いて事業活動を行う企業グループとしての責任として、環境に配慮した商品開発や環境保全活動等に加え、地域の課題解決に向けて行動できる次世代を育成するプログラム「アサヒ若武者育成塾」を行っています。

➡アサヒ若武者育成塾

<http://www.asahigroup-holdings.com/csr/wakamusha/index.html>

➡ニッカ・ブレンダーズバー(国連大学から徒歩7分)：

<https://www.asahibeer.co.jp/area/search/shop.psp.html/93016952.htm>



プログラム冊子(環境配慮型印刷)

◆株式会社サンエー印刷

(<http://www.suna.co.jp/>)

環境問題に対して真摯に取り組み、環境に配慮した印刷技術を導入しており、FSC 認証紙と輸送マイレージと地産地消に着目したライスインキを使用し、印刷はアルカリ性現像廃液を出さず、イソプロピルアルコールなどを含む湿し水が不要な「水なし印刷方式」を採用しています。私たちはココロとからだと地球にやさしい LOHAS PRINTING を目指します。

「SDGs と ESD」特別企画シンポジウム ー ESD の実践と研究の有機的連携にむけてー

日本 ESD 学会



UNITED NATIONS
UNIVERSITY
UNU-IAS

2018 年 3 月 3 日開催

主催: 日本 ESD 学会、国連大学サステナビリティ高等研究所

後援: 文部科学省、環境省、ESD 活動支援センター、(独)国際協力機構(JICA)

協力: 地球環境パートナーシップオフィス(GEOC)



Education
2030

《趣旨》

2015 年 9 月に持続可能な開発目標 (SDGs) が発表されて以来、様々な ESD に関連する取り組みが SDGs と関連して実施されています。本特別企画シンポジウムは、「「SDGs と ESD」特別企画シンポジウムー ESD の実践・研究の有機的連携にむけて」と題し、2017 年 4 月に発足した「日本 ESD 学会」と国連大学サステナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) の主催で行うものです。SDGs の達成にむけて、SDG 4.7 で指摘されている ESD の実践と研究の有機的連携、教育の質の向上と持続可能な開発、国内外の経験などをつながけながら、これまでの課題と今後の展望について、議論を深めます。

開催時期: 2018 年 3 月 3 日 (土曜日)

(※ 3 月 4 日は、関東 ESD 学び合いフォーラムが青山ウイメンズプラザにて開催されます)

(1) シンポジウム (13:30-18:00、開場 12:30)

会場: 国連大学 ウ・タント国際会議場 (350 名収容)

(<https://goo.gl/s7sM2a> 半蔵門線表参道下車徒歩 7 分)

参加手続き: 事前登録制 (参加費無料、UNU-IAS ウェブサイトよりお申込み下さい)

URL: <https://connections.unu.edu/civcrm/event/register?id=380&reset=1>

(2) 懇親会 (18:00-20:00)

会場: 国連大学 2 階レセプションホール (100 名収容)

参加手続き: 完全予約制 (4000 円、事前振込)

URL: <http://jsesd.xsrv.jp/>

出席者 (350 名): 日本 ESD 学会会員、関係省庁、RCE 関係者、自治体関係者、ESD コンソーシアム関係者、ユネスコスクール関係者、ESD 活動支援センター関係者、環境パートナーシップオフィス (EPO)、学校教育・教育委員会関係者、社会教育関係者、国際協力関係者、SDGs 関係者／企業、ユース、一般市民、含む

展示 活動・研究紹介等の資料展示 (配布・展示テーブル設置)

詳細は、URL (日本 ESD 学会): <http://jsesd.xsrv.jp/> 参照

《事務局・受付》

事務局・受付: 日本 ESD 学会／国連大学サステナビリティ高等研究所

総合司会:井上美樹(愛媛県新居浜市教育委員会 指導主幹)
総合司会:福井昌平(CI 戦略プランナー/日本 ESD 学会評議員)

ーシンポジウム前半(13:30-16:00)ー

13:30

開会

主催者挨拶 長友恒人(日本 ESD 学会 会長/奈良教育大学 名誉教授)
主催者挨拶 渡辺綱男(国連大学サステイナビリティ高等研究所
シニアプログラム・コーディネーター)
来賓挨拶 中井徳太郎(環境省大臣官房 総合環境政策統括官)
来賓挨拶 池原充洋(文部科学省 文部科学戦略官
/日本ユネスコ国内委員会副事務総長)

13:50

導入

ESD:個人変容と社会変容の学びの連関
佐藤真久(東京都市大学 教授)

14:00

第一部:ESD の経験と到達点

講演 持続可能性のパラダイムにおける教育の役割
末本誠(湊川短期大学 学長/神戸大学 名誉教授)
講演 ESD 推進における国連大学の役割
塚本直也(国連大学サステイナビリティ高等研究所 プロジェクト・ディレクター)

14:50

第二部:教育の質の向上と ESD

第二部コーディネーター:多田孝志(金沢学院大学 教授)
・広木敬子(横浜市立永田台小学校 教諭)
・高木幹夫(日能研 代表)
・原明子(岡山 ESD コンソーシアム ESD コーディネーター)
第二部コメンテーター:黒田友紀(日本大学 准教授)

休憩(16:00-16:20)

ーシンポジウム後半(16:20-17:55)ー

16:20

第三部:持続可能な開発/SDGs と ESD

第三部コーディネーター:湯本浩之(宇都宮大学 教授)
・三隅佳子(北九州 ESD 協議会:RCE 北九州 顧問)
・河野晋也(奈良教育大学附属小学校 教諭/ESD 日本ユース)
・長澤恵美子(一般社団法人日本経済団体連合会 教育・CSR 本部 統括主幹)
第三部コメンテーター:見上一幸(宮城教育大学 学長/日本 ESD 学会 副会長)

17:30

総括

実践・研究をつなぐ(全体討議):人と社会の持続可能性の構築にむけて
岩本 渉(アジア太平洋無形文化遺産研究センター所長)

17:55

閉会

主催者挨拶 小澤紀美子(日本 ESD 学会 副会長/東京学芸大学 名誉教授)

ー懇親会(18:00-20:00)(※完全予約制)ー(<http://jsesd.xsrv.jp/>)

※自由展示・交流コーナー(※撤収は 20:00 までをお願いいたします。)

「SDGs と ESD」特別企画シンポジウム ー ESD の実践と研究の有機的連携にむけてー

主催者挨拶

長友恒人

(日本 ESD 学会 会長／奈良教育大学 名誉教授)

2015 年 9 月の国連総会で SDGs が採択されました。途上国の課題は、先進国を含めた全てのステークホルダーが取り組むべきグローバルな課題であることが国際的に合意されたことは歴史的にみて画期的な出来事でありました。2014 年の GAP を踏まえて ESD の将来を模索していた実践者にとっても、2030 年までの SD の Goals が明確になったことは朗報でした。

同時に、これまで環境、国際理解、開発、人権、平和等々の個別分野で取り組まれてきた ESD の内容と方法を複合的・融合的に捉え直して、21 世紀の教育として取り組むことの必要性が強く意識されました。それを実践の場でどのように具体化するのか。ESD は世代を問わず、多様なステークホルダーが連携協働して、持続可能な社会を創造するための価値観を自己形成し、行動を生み出す変容の教育です。研究は実践をベースとし、実践は研究成果を活用して相互に高まることが求められます。そのためには何が必要なのか。

ESD 研究に継続的に取り組んでこられた国連大学サステナビリティ高等研究所と共同で開催する本日の「SDGs と ESD」特別企画シンポジウムがその方向性を探る議論の場となり、ESD の今後の進展に弾みをつける場になれば幸いです。

主催者挨拶

渡辺綱男

(国連大学サステナビリティ高等研究所 シニアプログラム・コーディネーター)

この度の特別企画シンポジウムを日本 ESD 学会の皆様と共同で開催させて頂くことを嬉しく思います。国連大学は日本に本部を置く唯一の国連機関として、過去 40 年以上に渡り、調査研究と研修等の能力育成事業を通じて地球規模の問題の解決に貢献してきました。東京に拠点を置く国連大学サステナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) は、サステナビリティとその社会的・経済的・環境的側面に注目しながら、政策対応型の研究と能力育成を通じて、持続可能な未来の構築に貢献することを使命としています。UNU-IAS では、2003 年より持続可能な開発のための教育の 10 年の目標に貢献するため ESD プロジェクト実施し、多様なステークホルダーの世界的ネットワークである「持続可能な開発のための教育に関する地域の拠点 (RCE)」と、高等教育機関のネットワークである「アジア太平洋環境大学院ネットワーク (ProSPER.Net)」の 2 つのイニシアチブを通じて研究・開発の企画・実施を行っています。国際社会は、2015 年の持続可能な開発目標 (SDGs) とパリ協定という意欲的な目標の合意から間もなく 3 年を迎え、目標を具体的な行動に移すための重要な時期を迎えています。これらの大きな目標を達成するためには、多様な主体によるパートナーシップを通じて課題解決に向けて協力し合うことが必要不可欠となります。本シンポジウムを機に、新たな連携や活動のきっかけが生まれ、様々なつながりの中で ESD が今後益々発展し、地球規模課題の解決に寄与してゆくことを願います。

ESD の実践と研究の有機的連携、日本 ESD 学会への期待 —「SDGs と ESD」特別企画シンポジウムの開催に寄せて—

第一部:ESD の経験と到達点

《基調講演者》

末本 誠

(湊川短期大学 学長／神戸大学 名誉教授)

報告者は、2014 年 10 月に岡山市で開かれた「ESD 推進のための公民館—CLC (community learning center) 国際会議」において、基調提案者の一人として登壇した経験をもつ^{*1}。この会は ESD における、公民館—CLC を拠点にした社会教育ないしはノンフォーマル教育の役割を議論することを目的としていたが、大きくは ESD というパラダイムにおいて求められる、教育一般の在り様の見直しを意図していた。先の報告では公民館—CLC 関係者の集まりという特殊性から強いて学校外での教育を問題にしたが、本日の報告ではそこで意図したことを、学校を含めた教育全体の在り方として改めて紹介し、本日のテーマである「持続可能性というパラダイムにおける教育の役割」を問い直す観点を、いくつか提示することにした。報告者が岡山での集まりでの提案を基に、本日のテーマとの関係で改めて確認したい事柄は次の 3 つである。

① 1 つ目は、「持続可能性」というわれわれが直面している課題の特質、とりわけその複雑性が教育に何を求めることになるのかという点である。SDGs が、「持続可能性」という課題の解決を 17 という多数の項目に置き換えてその推進を提起したことに示されるように、この問題は複雑な成り立ちをもっている。何らかの 1 個の原因と 1 個の結果が対応するという従来のパラダイムが通用しない、複数の原因と複数の結果が対峙する複雑な事実とわれわれは直面している。こうした事態は、教育の在り方に新たなパラダイムでの対応を求める。この問題は少なくとも、従来のような体系化された知の伝達というパラダイムでは対応できない事柄であることに、改めて目を向ける必要がある。

こうした新たな教育的パラダイム理解に基づく実践例として、報告者が神戸大学在職中に取り組んだ試みを紹介する。報告者は、当事 11 あった学部で 7 学部をつないだ ESD 関連の教員集団のまとめ役を果たした経験をもつ (～2015)。こうした取組をするに至った理由は、この教育では事象解明を専門とする何らかの担当学部を選ばよというわけではなく、複数の学部が共同して取り組む学際的な新たな知の創造が求められていると考えたことにある。「持続可能性」という問題は複雑であるがために、その全貌を単独で解明する学問はまだ存在しない。しかし大学は部分的な知の探究には取り組んできており、その成果も様々な研究領域で蓄積されてきている。それらを結びつける総合的な知の創造過程に、ESD を位置づけることが必要であると考えたのである。

② 2 つ目は、このような「持続可能性」および ESD の必要に応えるにあたって、教育についての理解の拡張が求められるという点についてである。ESD においては、ユネスコの「学習権宣言」(1985)の「学習活動は (...) 人々を、なりゆきまかせの客体から、自らの歴史をつくる主体にかえていくものである」とする理念が、改めて思い起こされる必要がある。またその冒頭に述べられている「学習権とは、読み書きの権利であり、問い続け、深く考える権利であり、想像し、創造する権利であり (...)」が示している、学習ないしは教育についての新たな理解についても、再度注目してみる必要がある。

このように ESD においては、体系だった何らかの知を学生に伝達するという教育形態は、必ずしも十分とは言えない。ESD ないしは SDGs の推進においては、さまざまな領域で蓄積された知識が総合された、新たな知の創造およびその知を保有する新たな人間の育成が求められる。このことは、従来のような学校型の教育には限界があるという意味を持つだろう。SDGs の推進という課題からは、軽々に学校の限界を述べるのが適切ではないことは十分承知しているが、少なくとも ESD には知識伝達型の教育方法には限界があり、新たな教育の形態が必要になっていると考える。

③ 3 つ目は、2 番目に述べた事柄と関係する。まず確認しておくべき事柄は、「知識基盤社会」と言われる現代社会においては、自分を越えたはるかに大きな世界の理解には知識の習得が極めて重要な意味を持つということである。ここでは、『危機社会』の中で、ベックが「近代化に伴う危険は科学的知識に依存する」と指摘していることにも目を向けてみる必要があるだろう^{*2}。これは学校教育の各教科の教育において、子どもに客観的な知識の基本をきちんと修得する指導が不可欠であること

を意味するだろう。

一方でベックは、危険が「数値や数式の形で提示される」こと（知識）の重要性を強調しながら、さらに「危険の存在自体を信じるが必要になる」と指摘し「どのように生きたいのか、という古くて新しいテーマが浮上してくる」とも述べている^{※3}。つまり ESD においては、知識だけではなく自分の生き方に関わる価値観の再構築が求められるのであり、この課題に関わる教育の再構築が求められているということである。

報告者は岡山の集会では、この問題を公民館—CLC を拠点とした、地域住民の自分の経験からの気づきや危機感の共有と共同による、新たな経験知の創造の必要として提起した。つまり知識に対する経験のもつ重要性を指摘したのだが、その背景には、こうした新たな教育的パラダイムを考える上で、成人教育における成人の学習に関する理論からの示唆を得たという事実がある。例えばメジローによる、「道具的教育」「対話的教育」「省察的教育」を内容とする、「3 つの教育観」の提起は示唆的である。とりわけ 2 番目の「対話的教育」や 3 番目の「省察的教育」は、学校教育のなかでも重要な意味を持つものと思われる。例えば「対話的教育」が生み出す「蓋然的知識」は、対話の中で仮説が生み出され実践へと結びつくという展開を予定している点は、学校教育においても重要な事柄ではなかろうか。また 3 番目の「省察的教育」も、自己の経験の振り返りの中での気づきを通して学習者の認識枠組みそのものの変更を予定している点で、実践を支える価値観の変更にアプローチする方法として理解できる観点である。

このように、報告者は学校型の教育を否定するのではなく新たな方法論の導入の必要性や可能性の探究が、SDGs および ESD の今後の展開においては求められていると考える。

※1：この報告の全文は、日本公民館学会の年報に収録されている。『日本公民館学会年報』第 11 号 128-133 頁(2014)。／※2：ベック『危険社会』東廉・伊藤美登里訳 35～36 頁 法政大学出版 1998。／※3：ベック 同上 37～38 頁。

《基調講演者》

塚本直也

(国連大学サステイナビリティ高等研究所 プロジェクト・ディレクター)

持続可能な開発の概念の端緒は 1987 年のブルントラント委員会に遡りますが、実践という意味では、1992 年にリオで開催された「環境と開発に関する国連会議」を発端とし、2012 年の「国連持続可能な開発会議（リオ+20）」を経て、2015 年の「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」と「持続可能な開発目標（SDGs）」の制定によって国際社会にしっかりと根づいてきたと言えます。

国連総会での SDGs の合意を受けて、各国或いは各コミュニティにおいて、どのように SDGs を実践するか（SDGs の地域化）が検討・実施されています。以前のミレニアム開発目標（MDGs）が開発途上国向けであったのとは対比的に SDGs はすべての国やステークホルダーが共通の目標として取り組むべき課題として設定されています。この流れの中で、地域にとって重要な課題が、より大きな持続可能性の観点を踏まえて、他の課題とともに統合的に解決されていくことは、望ましい展開です。その一方で、全世界で依然として 8 億人近くが、十分な食料を手にできていません。2013 年の時点で、小学校就学年齢の子ども 5,900 万人が学校に通っていません。2012 年になっても依然として 11 億人が、電気のサービスを受けられていません。SDGs を語る際に「誰も取り残さない（no one left behind）」というキャッチフレーズが良く使われます。世界の情勢に目を向け、自分たちは何が出来るのかを考えることも ESD の重要な役割だと考えます。

私は、SDGs に含まれている「持続可能な開発のための変革（transformation）」という概念も極めて重要だと考えています。持続可能な開発を進めるためには従来の社会経済システムの改善や進歩ではなく、「変革」が必要であるというメッセージを国連総会に出席した各国首脳が合意したという事実にも重みを感じるからです。そして、変革がより根本的である程に、その実現のために教育の果たす役割も大きくなってくると考えます。では、変革のための教育に正しい答えはあるのでしょうか？私自身は、様々なステークホルダーの間で異なる意見が存在するという事実や、正しい答えがない問題にどう取り組むかを教えることが ESD の重要な役割のひとつではないかと考えています。

そして、ESD 学会活動においても、これらの課題への取組がより一層進展されますことを一会員として期待をしております。

第二部:教育の質の向上とESD

《第二部コーディネーター》

多田孝志（金沢学院大学 教授）

持続可能な開発のための教育（ESD：education for sustainable development）は、思想と哲学の教育であり、価値と倫理の教育であり、感情と行動と生き方の教育である。総括的に表現すれば、希望ある未来社会の構築ができる人間形成のための教育である。

この教育は、いま、第3期に入ったように思える。黎明期、中山修一（広島大学）、草原克豪（拓殖大学）を中心に、環境教育から阿部治（立教大学）、開発教育から赤石和則（拓殖大学）、国際理解教育から（多田孝志）が国際統括官の会議室に参集し、この教育の理念の学習と普及発展の方途についての論議をしたことが懐かしく思い出される。（所属は当時、敬称略）

第二期は、啓蒙期といえよう。国立教育政策研究所「学校における持続可能な発展のための教育に関する研究会」、わが国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」関連庁連絡会議等が開催され、ESDの経緯、教育内容、学習方法、指導方法、育みたい力、多様な主体との連携・協働の在り方などが明示された。

文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会は、ユネスコスクールをESDの推進拠点として位置付けた。このことにより、日本国内の加盟校数が「国連持続可能な開発のための教育の10年（DESD）」の実践研究に取り組み始めている。

現在を第三期、普及・発展期と位置づけたい。この時期に日本ESD学会が創設されたことへの期待は多大である。

その期待を下記に修練してみた。その第一は、ESDに関わる理論と実践の融合である。新たな教育潮流であるESDの理論は、必ずしも十分に探究されているとはいえない。人類史、教育史上の位置づけ、教育潮流としての特色や意義の考察、さらに、持続可能な社会、主体性、参加などの用語の分析・解説なども必要であろう。

ESDの教育実践が、事実として、希望ある持続可能な社会の担い手を育成するためには、新たな教育であるが故に、理論的背景の考察が不可欠である。他方、実践研究は、理論にすべてを依拠しては、矮小化する。理論の限界性を認識しつつ、実践研究を補完する理論研究の成果を援用し、さらには、実践研究から生起する理論の構築に取り組むべきとも考える。いま必要なのは理論と実践を融合し、橋渡しする研究なのである。

第二は、ESDの研究が、学校現場の現状の改善に資することへの期待である。全国各地の学校や社会教育施設・過疎地域を訪ね実践研究仲間と語り合うと、子どもたちの精神的状況、教師たちの現状、過疎地の人々の生活等がきわめて厳しいことを感得する。ESDの特色は未来志向にある。その希望ある未来は、現在の改善なくして実現できないのではなかろうか。煌びやかさの探究とともに、教育の現実的課題・難題を解決する有用な方途としてのESDの実践・理論研究が進展していくことを期待してやまない。

《第二部登壇者》

高木幹夫（日能研 代表）

D-ESD が終わり、何か一つの終了があったかのように誤解を持つ雰囲気があるかもしれない。実際には教育とSDの関係はこれからも誰にとっても最優先課題になると考えている。むしろ今まで以上に教育におけるSDの関わり方は重要になっていくと思う。

これまでに人類が作ってきた「知識」に対して、教育が跪くだけであった時代ならば、過去を学びつくすことが大切だったのだろう。過去に生み出された知識を受けつぎ、覚え、蓄積していくことが「教育」であった時代なら。けれども持続可能性と発展と経済とが、共に補完関係になる未来を作るためと考えれば、どれだけ「教育」の変化を作っていかなければならない。

私たちが改めて確認し直したい感覚として「目的と手段」「原因と結果」という考え方があると思う。今までは「目的」と「手段」で進むことができた、予測可能な世界。これからは未来を見つとも、「原因」を作り続けていく。何らかの保証があるから行動をするというのではなく、未来に対する保

証がない場面でも、自分自身がどう「原因」という行動をとることができるか。それがどのような「結果」を生むかを予測しつつ、必ずしも予測する結果にはならないということを受け入れつつ、続けていくこと。

「学習指導要領の変更が10年ごとでは間延びをする」という議論があり、せめて5年で変更をしようという意見も出てきている。しかし、本当に国家の中で決めていかれるほど世界の変化は待ってくれるのか。枠組みを変えることで変化を作るのか、小さな変化を作って埋める、ということになっていくのか。両方が繋がっていけば理想なのだろうけれど、私たちにできることは、私たちにできることをやっていくことであり、過去を語るのではなく、私たちが想像し実行できる未来を語るということだろう。日本ESD学会が多様な視点からその言葉を集める場に、発信できる場に、未来を考えられる場になっていかれるように願っている。学校外教育の立場から、その場づくりに私自身も貢献していきたい。

《第二部登壇者》

原明子（岡山ESDコンソーシアムESDコーディネーター）

私は今まで岡山市のESDコーディネーターとして、公民館や学校、市民団体、行政、企業などあらゆる場所でESDが理解され、実践されることを応援する仕事をしてきた。ESDというものを説明し、どうやればいいかを一緒に考え、ヒト・情報・カネ・機会などのツールを紹介し、出会いによる化学反応を促進し、行われた実践を他の人たちに紹介し、ESDをやっていく仕組みをつくり・・・といったことである。

ESDを実践しようとする人は、気持ちはあれど、やり方に自信がない。誰も実物を見たことがない竜を踊れと言われていたようなものだから。これでいいのかと疑念を持ちながらやっている。

そういう多くの実践者に対し、ESDの研究者はごく少数である。（彼らも竜を見たことはない。）しかしESDはボトムアップであるから、彼らは押し付けない。自ら考え、育つのを待つ。そうするとやっぱりよくわからないのである。みんな正答を教えてもらいたいから。わからないことがESDの肝なのだけだ。

実践と研究の有機的連携と言われて私が思うのは、研究者が地べたで実践するしかないでしょうということ。実践者ががんばって研究するしかないでしょうということ。

境が溶けるのがESD。そのためには多様な人による自由に批判的で更新し続ける創造の場が必要。

私はコンソーシアム事業のコーディネーターとしてこの3年弱、幸いにも3人の同僚と毎週議論をかわすことができた。研究者と市民活動家と元小学校校長とコーディネーターというメンバーだった。

最初は効率が悪いと思っていた。ひとりでできることを共有しないといけない。いちいちどうやるか話し合わなければならない。しかしそのうち考えは変わった。効率は悪いかもしれないが、質が上がる。その議論は、主にユネスコスクールでの実践や教員研修会のあり方を巡ってのものだったが、時には子育てや介護のエピソードから思いがけず深い考察にいたることもあった。忌憚ない議論の深まりの中で、教育や持続可能な社会のあり方、考え方についての貴重な気づきをいくつも得た。そしてそれらの気づきが自分を変え、自分の仕事、自分の実践を密かに変えて行った。

ESD学会に期待することは、大海に浮かぶ筏のような存在になってくれること。海に飛び込み格闘している人たちと、葦のボートからライトを当てる研究者とが、ちょっと一息ついて話ができる大きな筏。

闇夜ではあるが、目指して行く先だけはぶれない共通の目標である。

《第二部登壇者》
広木敬子（横浜市立永田台小学校 主幹教諭）

○学校教育目標：「一人一人が輝く永田台」

永田台小学校は、「持続可能な未来の担い手を育てる学校」であり、教師の役割は、授業を通じてそれを実現すること。

○永田台小学校の在り方

ESD が内在した学校は、教育活動のどの場面においても、ESD のビジョンが染み込んでいる。それは、学校全体に流れる空気感としても存在する。永田台小学校は「ケア」の溢れる学校である。

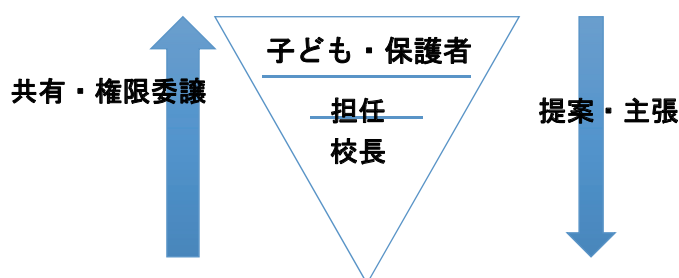
○学校として大切にしていること

- ・進んであいさつをする（心をつなぐ コミュニケーションの始まり）
- ・人の話をしっかり聞く（かかわりをつくる基盤）
- ・時間を守る（計画的に 内容を充実させる）
- ・学校をきれいにする（愛校心 自校肯定感の醸成）

○特色

- ・元気な職員室（先生が元気である＝子どもたちへ最高のパフォーマンスの基盤）
- ・つながりと共有（教職員間、地域、外部の専門機関とのつながり→本質に迫る解決）
- ・外部機関との連携（その道を生きる人々と出会う→感性、未来を生きる心の育成）

○校長のリーダーシップ ～壁を壊して橋を架けるために～



傾聴・共感・癒し・気づき・説得・概念化・先見力・執事役・人の成長に関わる・コミュニティづくり（サーバントリーダーシップを実現するための10の気づき）

○教職員の在り方

- ・授業力をつける（自分の課題を明確に 常にチャレンジ）
- ・ケアの精神をもつ（人を大切に、周りを見る）
- ・働き方を工夫する（元気な先生であるために、自分の働き方を見直し、改善する）

《第二部コメンテーター》
黒田 友紀（日本大学 准教授）

ESD の実践と研究について、いくつか感じていることをお伝えしたい。

1 点目は、教育の大きな視点からすると、日本においては、持続可能な開発目標（SDGs）のうちの目標4の「すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」ことを実質的に実現するなかで、ESD の実践を考えていくことが重要であると考え。日本は、基礎的な教育制度が整っている国ではあるが、世界のなかで子どもの貧困率が高い国でもある。生きるための基礎となる部分をすべての人に保障するために、国際的な機関のマクロな調査や国内の調査の分析などにももつぎながら、すべての人の公平で質の高い教育を実質的に実現するための教育条件の整備とあわせて、ESD の実践と研究が重ねられていくことが大切であろう。

2 点目に、私自身の研究課題のひとつでもある、すべての子どもに質の高い学びを保障するための授業の実現に関していうならば、ユネスコスクールや ESD の実践において、オーセンティック（真

正)で本質的な学びがさらに探究されることが重要であると考えている。SDGs の内容も多岐にわたるので、ESD の実践としてそれらを教科のなかで扱う授業開発も深められる可能性がある。教科書の内容や項目を超えて、世界で生じている複雑な課題と自分自身をつなげて思考する本質的な学びの実現が、どの子どもにとっても必要である。そのために、さまざまな教育実践を交流しあい蓄積することと、ネットワークを作り広げていくことが、ESD のさらなる発展につながると思う。

3 点目は、私自身が理工系の学部で学生とともに学んでいるなかで強く感じることであり、ESD の理念や実践が市民の教養のひとつとして生まれ、浸透していくことを期待したい。大学の教養科目の授業で、SDGs や ESD について紹介すると、授業後には必ず学生から、日本でもっと ESD が普及すべきだというコメントが寄せられる。理工系の学生は、将来的にエンジニアとなって科学技術の開発に直接関わる者も多い。理工系の学生のみならず、すべての市民にとって、身近な課題から自分と世界の在り方を問い、社会の発展と維持について思考することが極めて重要である。右肩上がりの経済や社会を構想することが困難な時代に、ESD の理念と実践と研究が、市民としてのすべての人々の生活に結び付き、今とこれからを考える基礎となることを希望している。

第三部:持続可能な開発／SDGs と ESD

《第三部コーディネーター》

湯本浩之（宇都宮大学 教授／NPO 法人開発教育協会 副代表理事）

持続可能な開発目標（SDGs）の目標 4.7 を改めて確認すれば、そこには次のように書かれています。

4.7 2030 年までに、すべての学習者が持続可能な開発を推進するために、とりわけ、持続可能な開発と持続可能なライフスタイル、人権、ジェンダー平等、平和と非暴力の文化の促進、そしてグローバル・シティズンシップのための教育、および、文化の多様性と持続可能な開発に対する文化の貢献を深く理解することを通じて、それに必要な知識と技能を修得できるようにする。

（United Nations 2015, 筆者仮訳）

このように「目標 4.7」は、持続可能な開発だけではなく、人権やジェンダー平等、平和や非暴力、グローバル・シティズンシップ、そして文化の多様性などに関わる教育や理解も必要であると呼びかけています。共に生きることのできる公正で平和な社会や未来を築いていくそのプロセスを「持続可能な開発」と呼べば、そのプロセスを担っていくには、上記に例示されている各課題に関わる知識や技能も不可欠であると理解できるのではないのでしょうか。そして、「目標 4」自体の目標が「すべての人に質の高い教育を包摂的かつ衡平に保障し、生涯学習の機会を提供する」とあることから、そうした知識や技能を若者や子どもたちはもちろん、大人たちや教師たちも身に付けていくことができるようにサポートするのが教育の役割だと理解することもできるでしょう。

そうだとすれば、まだまだ歴史の浅い ESD の実践や研究の今後を考える上で、政府・自治体、学校・大学、企業、そして市民組織などといったステイクホルダー間の一層の有機的連携を図ることはもちろん、開発や環境、人権やジェンダー、平和や非暴力、そして、シティズンシップや多文化などの課題に関わってきた教育実践や教育研究の経験や知見にも学びながら、こうした課題間の有機的連携を図ることも重要ではないのでしょうか。それは日本 ESD 学会のひとつの大切な役割なのではないかと考えています。

《第三部登壇者》

河野晋也（国立大学法人奈良教育大学附属小学校 教諭／ESD 日本ユース）

2014 年 ESD に関するユネスコ世界会議において、5 つの優先行動分野が示された。その一つがユースである。そこに採択された「ユース・ステートメント」には、教育機関や政府がユース主導のプロセスを尊重し、支援していくことが提案されている。持続可能な社会の担い手を育成することを目的とする ESD においては、ユースのこれからの活躍は注目すべき行動分野であることは間違いない。

国内でも、精力的に活動続けるユースは多い。例えば、世界大会以後も継続的に実施されている「ユース・カンファレンス」（五井平和財団主催）には、毎年全国からそれぞれの立場で課題意識を持った若者が集まり、活発な議論を行っている。多くの参加者は、カンファレンス後も SNS 等を活用して情報交換を行い、それぞれの活動を広げ、学び合っている。今年度実施された第 4 回ユース・カンファレンスにも、企業、NPO、大学職員、教員といった背景の違った参加者が集まった。違う立場の人間が会うことで相互に足りない視点を補い合ったり認め合ったりする場になっていた。実際にその後も数多くの企画、プログラム、イベントが立ち上げられ学び合う機会がユース自身の手でつくられている。こうした次代を担うユースの行動力や発信力は、SDGs の達成に不可欠なものだろう。

こうした魅力的な可能性を秘めているからこそ、現在のユースの活動に課題を見出し、これまでの ESD の研究成果を生かす道筋を検討していく必要があると私は考える。

例えば、ユース・カンファレンスやその後の活動では、熱く語り合う仲間と場を得ることができるが、一方で話し合うことが目的になってしまっていないだろうか。そこから何を学ぶかという、振り返りができているだろうか。ユースが取り組む数多くの企画、イベントはゴールではなくきっかけである。SD についての情報交換や啓発に留まっていたのではもったいない。ユースは「学び手」であると同時に「実践者」でもある。これまでの ESD における理論を骨組みとして位置付けることで、ユースの実践はより具体化されていくのではないだろうか。研究の成果をユースの活動に還元していったり、ユースの活動を理論に取り入れていったりといった理論と実践の往還がこれから必要になってくると考える。

同時に、ユース間で話し合ったことが、話し合いの参加者のレベルで留まってしまっており、地域や仲間のところに持ち帰り、活動の質の向上に生かすことができているのかを検討する必要がある。例えば、第 3 回ユース・カンファレンス後には森林環境に関する授業について複数の学校で実践を合い、成果や課題を報告し合うという形が生まれたが、学校教育という枠組みの中であり、それ以外のマルチステークホルダーとの連携には至っていない。様々な立場をもつユースが集まるからこそ可能なコラボレーションによって、よりその実践は新しい可能性を発掘していけると期待している。

これからの ESD においてはこうした強みと課題をもった若者をどのように導いていくかということが大切である。彼らを育てるべき人としてではなく、一緒に実践の中に巻き込んで協創していく人としてとらえていく必要があり、そうした若者が実社会でどのように影響を与えていくのかにスポットを当てた研究に今後期待していきたい。

《第三部登壇者》

長澤恵美子（一般社団法人日本経済団体連合会 教育・CSR 本部 統括主幹）

経団連では、2017 年 11 月 8 日に会員企業が遵守すべき企業行動原則である「企業行動憲章」を 7 年ぶりに改定しました。2010 年の前回改定から、国際社会では、グローバルな諸課題の解決に向けた企業の貢献が一層重要になっています。とりわけ、2015 年に国連で採択された「SDGs（持続可能な開発目標）」の達成に向け、民間セクターに対して、創造性とイノベーションの発揮が強く求められています。そうした中、経団連では、革新技术を最大限活用し、人々の暮らしや社会全体を最適化した未来社会「Society 5.0」の実現を目指しています。経済成長と社会的課題の解決が両立するこの未来社会の姿は、国連で掲げられた SDGs の理念とも軌を一にするものです。

そこで、Society 5.0 の実現を通じた SDGs の達成を柱として、企業行動憲章を改定しました。

今後、企業が、倫理や社会的責任に十分配慮しつつ、持続可能な社会の実現に向けて行動していく上では、役員・従業員の社会に対する感度を高めていく必要があります。ESD が持つ価値観を企業にも浸透させていくことが益々重要になっています。

《第三部登壇者》

三隅佳子（北九州 ESD 協議会：RCE 北九州 顧問／

認定 NPO 法人国連ウイメン日本協会副理事長、北九州 会長）

I、ESD の実践と研究の有機的連携（北九州 ESD 協議会を事例とする）

北九州 ESD 協議会（RCE 北九州）は、北九州地域の ESD 推進をめざして、市民の呼びかけによって 2006 年 9 月、産学官民 44 団体（現 75 団体）で発足。同年 12 月に国連大学から RCE に認定された。

（１）アクションプランの策定と実施・・・ESD 推進のための具体的活動（2006～2016 年）

プランの策定：参考にしたのは過去の経験である。北九州はかつて深刻な公害被害に見舞われたが、運動と調査研究の有機的な連携によって克服した。従って、ビジョンでは「公正で持続可能な社会の実現を目指して市民一人ひとりが持続可能という概念を理解し、達成するための実践活動が行えるように、(略)」とし、重点目標を短期、中期、長期で定めた。

（２）短期（2006～2007 年）は①組織、計画の作成②ESD 概念の啓発③参画主体のネットワーク化である。重点事業は ESD 研究者によるシンポジウム、団体への出前講演で、ESD の概念について学習。市民・研究者の協働で北九州の目指す「ESD の木」の作成（図）。韓国インチョン、トンヨンへのスタディツアー（現在まで継続）。また ESD 認知度調査を開始した。

（３）中期（2008～2010 年）は①ネットワーク化とパートナーづくり②現教育の「ESD 化」③ ESD の開発普及・推進。重点を ESD の普及・啓発とし「ESD コーディネーター育成講座」を開始。広報誌「未来パレット」の発行。コーディネーター中心に、市民センター拠点事業を開始

（４）長期（2010～2014 年）①人材の育成②共同研究③国内外との知識・経験の共有化 発信で 2012 年 4 月、市の ESD 推進係と協働で ESD コーディネーター育成「ESD 未来創造セミナー」を実施、45 名が修了（2 年間継続）。市民センター中心に活動が広がった。2013 年 3 月には市内 10 大学連携「北九州まなびと ESD ステーション」がオープン。北九州環境ビジネス推進会（44 社）も研修に ESD を取り入れた。市は 2013 年に第 6 回「アジア太平洋 RCE 地域会議」を誘致し、16RCE、700 名が参加、「実践と研究」の連携が図られた。このシンポジウムで「北九州の ESD 推進に関する研究会」は、成果と課題を報告。北九州 ESD 協議会の課題の明確化に繋がった。

II、今後に向けて

2015 年 11 月 SDGs を視野に ESD の普及にむけて、ESD 研究者等が脚本に関わったミュージカル「青い地球は誰のもの～持続可能な地域と地球の未来～」を上演（2000 人参加）成功であった。2016 年 3 月協議会は新北九州 ESD アクションプラン「自分を変え、まちを変え、未来を変えていく、北九州 ESD」を策定。ESD の北九州全域への普及を目指す。また、市は 2017 年 11 月環境基本計画を改定、副題を「環境首都・SDGs 実施計画」とし SDGs を大々的に取り込んでいる。

III、日本 ESD 学会への期待

- ・それぞれの団体は独自の方法で ESD 活動を実践しているが評価の方法が確立していない。知識や技術がどの程度できているか明示するルーブリックの開発が望まれる。ESD 学会に期待する。
- ・ESD の認識方法の整理。活動の実証研究。（データの整った研究は、‘実践’の意味の裏付け）
- ・学校のみならず様々な場の実践団体や実践者、研究者を有機的に繋ぐ仕組みづくりを期待する。また、実線報告の場となりベストプラクティス共有の場になることを期待する。
- ・海外の ESD 研究者、実践者との交流を深め、類似課題等の解決方法を学べる場を期待する。

《第三部コメンテーター》

見上一幸（国立大学法人宮城教育大学 学長／日本 ESD 学会 副会長）

長友先生はじめ多くのみなさまのお力で日本 ESD 学会が誕生したことをたいへんに嬉しく思います。教育大学に所属する者としては、ESD を学校教育の視点から観ることが多く新学習指導要領にも反映されたことを心強く思います。しかし、それを実現できるかどうかは教師の指導力によるところが大きく、教育実践の経験や理論的な裏付けについて互いに交換する場としての ESD 学会に期待しています。また SDGs の各目標は、課題を教科横断的に考え、カリキュラム・マネジメントを進める上からも助けになると思われます。SDGs にはグローバル化を目指す企業の関心も高いようであり、ESD 学会は ESD に関わるステークホルダーの横のつながりを強化したり、情報交換の場としても大いに期待されます。現在、IT の発達した社会の中でグローバル化と内向き思考の対立する将来の見通が難しい時代にあって、SD は重要な照準でもあると考えます。

総括

《総括》

岩本渉（アジア太平洋無形文化遺産研究センター 所長）

2015 年までを目標年次とした「ミレニアム開発目標」では、教育に関しては、「普遍的な初等教育の達成」が 8 つの目標の一つとして掲げられており、初等・中等教育における男女格差の解消が「ジェンダー平等の推進と女性の地位向上」という目標のうちの 1 ターゲットとして掲げられていた。同じ 2015 年を目標年次としてユネスコはじめ各国政府の教育関係者、国際機関などが策定したダカール行動枠組みでは、上記二つを含む数的な目標と質的な目標、あわせて 6 つの目標が掲げられていたのとは、様相を異にしていた。

2015 年に策定された「持続可能な開発目標」(Sustainable Development Goals, 以下 SDGs という。)では、目標 4「すべての人に包括かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」(外務省仮訳)として質量両面、また生涯を通じた教育を射程にしている点で、17 の目標の一つとしてではあるが、教育の現代的な課題を包括的にとらえているといえる。同時期にユネスコを中心に策定された、ポスト・ダカールともいえる“Education2030”と同じ内容であるのも、教育関係者の持続可能な社会への構築への教育の役割についての認識を示すものとなっている。

とりわけ、SDGs の目標 4.7 は教育の質を扱っているが、その中で、ESD とグローバル・シチズンシップ教育がともに掲げられていることには大きな意味があろう。私は、かねてから、ESD は時間軸を通じた共生を教え、グローバル・シチズンシップ教育は空間軸を通ずる共生を教えるもので、相互補完的なものと考えているからである。

他方、持続可能な開発といった場合、その舞台となるのは地域である。国連 ESD の十年の後継スキームとして策定された「グローバル・アクション・プログラム」の 5 つの柱のうちの 하나가、地域コミュニティであることも当然なものである。この地域コミュニティとの関連では、目標 4.7 が「文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育の促進」を提唱していることは、日本の現状を考えた場合大きく検討に値することと思う。このように考えてみると、ESD の推進には多くのステークホルダーが関与してくるし、それはまた必要なことなのである。

他方、2014 年の ESD に関するユネスコ世界会議で採択された「あいち・なごや宣言」においては、「科学・政策・ESD の実践のインターフェイスにおいて・・・すべての関係するステークホルダーが・・・共同的で可変的な知識の生産、普及、活用、イノベーションの促進に従事するよう促進し」(文部科学省仮訳)とうたわれている。

これらの意味から、ESD の理論的・実践的研究および ESD 実践の深化・発展を図ることをもって、持続可能な社会の構築に資することを目的として設立された日本 ESD 学会の果たすべき役割はきわめて大きい。

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム

— ESDの実践と研究の有機的連携にむけて —

導入講演

— 導入 —

《導入講演》

「個人変容と社会変容の学びの連関」

佐藤 真久

東京都市大学 教授

(日本ESD学会 理事 / 国連大学サステイナビリティ高等研究所 客員教授)

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

1

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム

— ESDの実践と研究の有機的連携にむけて —

本日特別企画シンポジウム：プログラム

13:30 開会	総会司会：井上美樹(愛媛県新居浜市教育委員会・指導主幹)
・主催者挨拶	総合司会：福井昌平(〇蔵館プランナー/日本ESD学会評議員)
・来賓挨拶	
13:50 導入講演	
14:00 第一部：ESDの経緯と到達点	
・基調講演：持続可能性のパラダイムにおける教育の役割 / 末本誠(漢川短期大学)	
・基調講演：ESD推進における国連大学の役割 / 塚本直也(国連大学サステイナビリティ高等研究所)	
14:50 第二部：ハネルディスカッション：教育の質の向上とESD	
・多田孝志 / 高木幹夫 / 原明子 / 広木敬子 / 黒田友紀	
一休(16:00-16:20) —	
16:20 第三部：ハネルディスカッション：持続可能な開発 / SDGsとESD	
・塚本浩之 / 河野晋也 / 長澤高美子 / 三隅佳子 / 見上一幸	
17:30 総括：実践・研究をつなぐ(全体討議)：人と社会の持続可能性の構築にむけて	
・岩本 渉(アジア太平洋無形文化遺産研究センター所長)	
17:55 閉会	
・主催者挨拶	
— 懇親会(18:00-20:00)(※完全予約制) —	

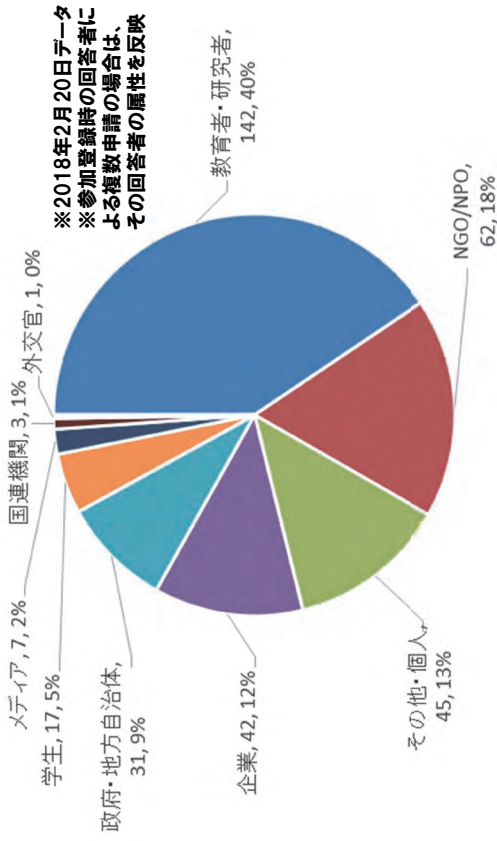
2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

3

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム

— ESDの実践と研究の有機的連携にむけて —

本日特別企画シンポジウム：参加者属性 (N=350)



2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

2

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム

— ESDの実践と研究の有機的連携にむけて —

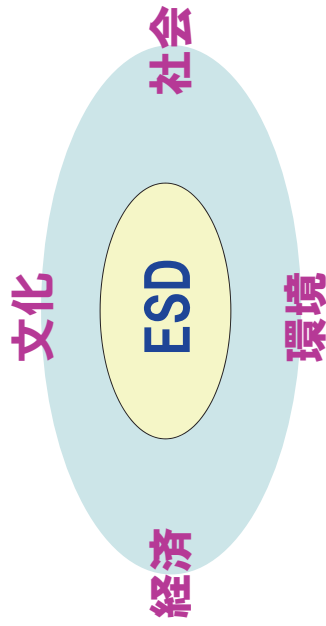
①ESD:2つの起源→持続可能な人間開発アプローチ



2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

4

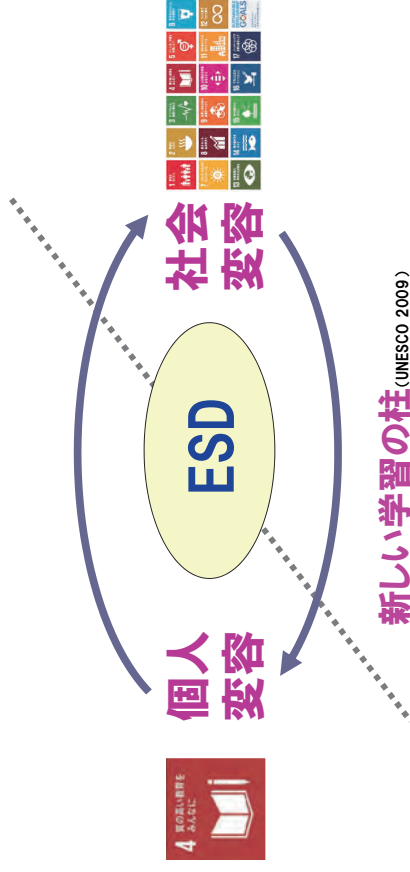
②ESD:持続可能性に関する諸課題とESD



2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

5

③ESD:個人変容と社会変容の学びの連関



新しい学習の柱 (UNESCO 2009)

“Learning to Transform Oneself and Society”

佐藤(2016)訳:個人変容と社会変容の学びの連関

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

6

④ESD:4つのレンズ(統合、文脈、批判、変容)

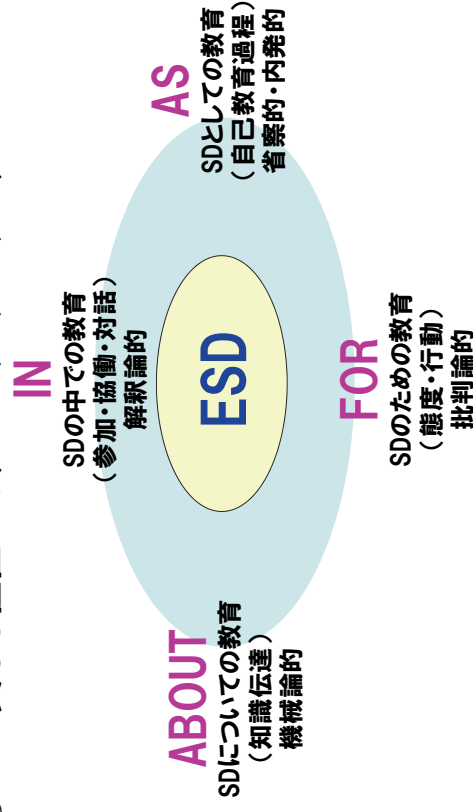


UNESCO(2012)に基づき筆者作成

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

7

⑤ESD:異なる位置づけ(About、In、For、As)

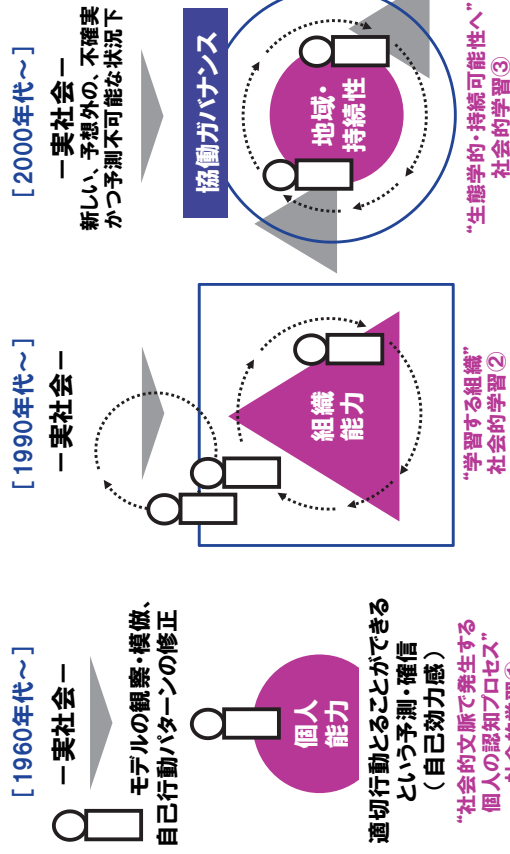


2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

8

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム
— ESDの実践と研究の有機的連携にむけて —

⑥ESD:社会的学習(第三学派) (佐藤ら、2016)



2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

9

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム
— ESDの実践と研究の有機的連携にむけて —

⑧ESDの意味するところ

持続不可能性への気づき

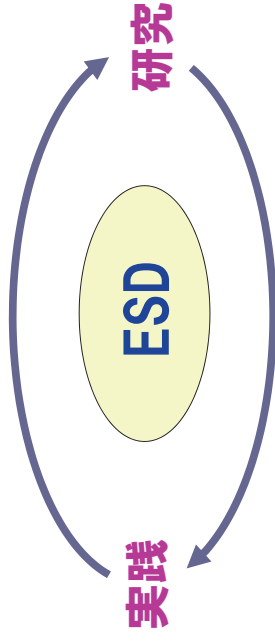
- ・環境、社会、経済、文化的側面の持続可能性
- ・持続可能性に向けた教育・学習の新たな方向づけ
- ・持続可能性に向けた教育・学習と研究(評価研究含む)の新たな方向づけ
- ・個人が変わる⇔社会が変わる
→主體的・対話的・協働的な学びの連関

11

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム

— ESDの実践と研究の有機的連携にむけて —

⑦ESD:実践と研究の有機的連携



2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

10

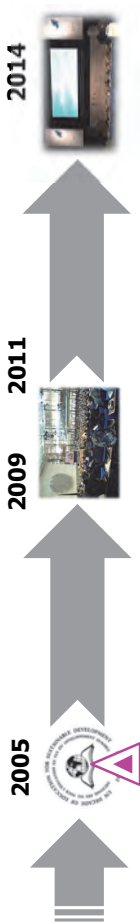
「SDGsとESD」特別企画シンポジウム
— ESDの実践と研究の有機的連携にむけて —

⑨これからの時代・・・

- ・コミュニケーションの質とスピードが高まる。
- ・グローバル社会・地域社会への個人の関与が強まる。
- ・個人が双方向メディアに直接参加する機会が増える。
- ・背景の違う多様な人々と協働する機会が増える。
- ・知識・技能の活用力が重要になる。
- ・生涯楽しく学び続ける学習継続力が重要になる。
- ・情報を吟味する力・合理的思考力が重要になる。
- ・予想外の変化に即座に対応する臨機応変力が重要になる。
- ・自分の目標を自分で見出して実践する「主体性」が重要になる。

安西祐一郎 (2014)「未来に生きる子どもたちのために」、ESDエコノミクス世界会議スークホルダー会合

12



DES D国際実施計画(2005)

- 一 持続可能な開発の基礎となる原則と価値観に基づく
- 一 環境、社会、経済という持続可能性の3つの領域すべてが健全な状態であるように取り組みを行う
- 一 生涯学習を推進する
- 一 地方のニーズ、認識、状況に基づき、地方のニーズを充たせば国際レベルでもその影響が及ぶことが多く、文化的にも適切である
- 一 フォーマル、ノンフォーマル、インフォーマル教育に取り組む
- 一 変化する持続可能性という概念の本質に適切していく
- 一 状況、世界的な問題、地方ごとの優先事項を考慮に入れて、教育の内容を検討する
- 一 コミュニティに基づいた意思決定、社会的責任、環境的責任、変化に適應できる労働力、生活の質という課題に対処できる市民の能力を育成する
- 一 学際的である。ESDは1つの学問分野に収まるものではなく、あらゆる学問分野がESDに貢献できる
- 一 参加型学習および高次元の思考技能を育むさまざまな教育方法を活用する。

UNESCO (2005) DES D International Implementation Scheme

13



ESD:新しい学習の柱(2009)

学習の4つの柱(7つのテンジョン)

「学習：秘められた宝」
(UNESCO 21世紀教育国際委員会 1996)

“access to learning”
→ 学習へのアクセス：アクセスの平等

Learning “to know”

→ 知ることを学ぶ：知識

Learning “to do”

→ 為すことを学ぶ：技能

Learning “to be”

→ 人間として生きることが学ぶ：価値

Learning “to live together”

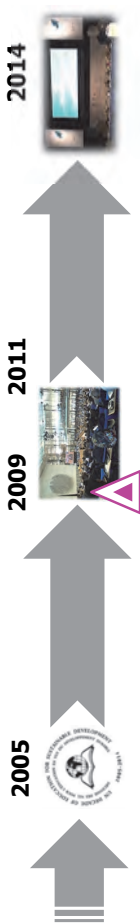
→ 共に生きることを学ぶ：相互理解・共生

“Learning to Transform
Oneself and Society”

佐藤(2016)訳：
個人変容と社会変容の学びの連関



15



ボン宣言：21世紀におけるESD(2009) ※要点

- ・ ESDは、あらゆる人びとにかかわる教育および学習に、新しい方向性を提示。ESDは、「質の高い教育」を促進し、包括性、基礎となる価値観、理念、実践の重要性を指し示す。
- ・ ESDで取り扱うべきテーマを述べており、とりわけ、水、エネルギー、気候変動、災害とリスク軽減、生物多様性の喪失、食糧危機、健康危機、社会的脆弱性・不安定といった課題を提示。さらに、これらの課題に取り組む際にESDが有効であると指摘、ESDが有する体系的・統合的アプローチを通して、「教育および訓練の仕組みに、新たな妥当性、質、意義、そして目的をもたらし、社会のあらゆるセクターの関与を要求」。
- ・ ESDが基礎としている価値観(正義、公正、寛容、充足性、責任)を提示しているだけでなく、ESDの方向性に大きな影響を与えている「地球憲章」を例に挙げ、ジェンダーの公正、社会の連帯感、および貧困削減の推進、配慮、高潔さ、誠実さの重要性を指摘。持続可能な暮らし、民主主義、人間の幸福には、環境保護と修復、天然資源の保全とその持続可能な利用、持続可能な生産および消費パターンに対する取組むことや、公正で平和な社会づくりなどが、ESDを裏打ちする重要な理念。
- ・ 不確実性への対処や複雑な課題の解決へのアプローチとして、「創造的で批判的なアプローチ、長期的思考、革新的な思考、革新的な相互依存関係を強調し、過去、現在、そして未来といった点を考慮している」とし、様々な相互依存関係を認識することのみならず、過去・現在世代と未来世代といった時系列に基づき取組むための配慮、活動の文脈化(地域・レベルからグローバルレベルへ)を強調。
- ・ ESDは、「新しいアイデアや技術と同様に、地域の文化に組み込まれている実践や知識に解決策を見出し、活用する技能を提供する」とし、新しいアイデアの構築のみならず、地域に内在化している知識の活用的重要性を指摘。

14



プロセスと学習(2011)

[ESDにおける重要な学習プロセス]

- ・ 協働と対話のプロセス
- ・ 全体システム(ホールシステム)として参画するプロセス
- ・ カリキュラムの刷新を行うプロセス(教授と学習ともに)
- ・ 行動的で参加型学習のプロセス

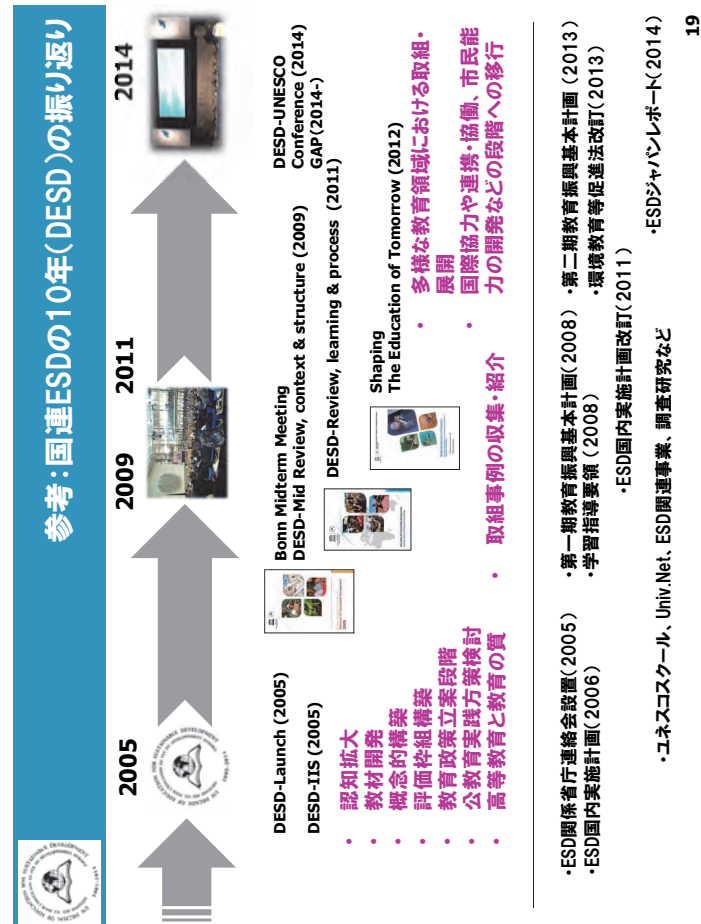
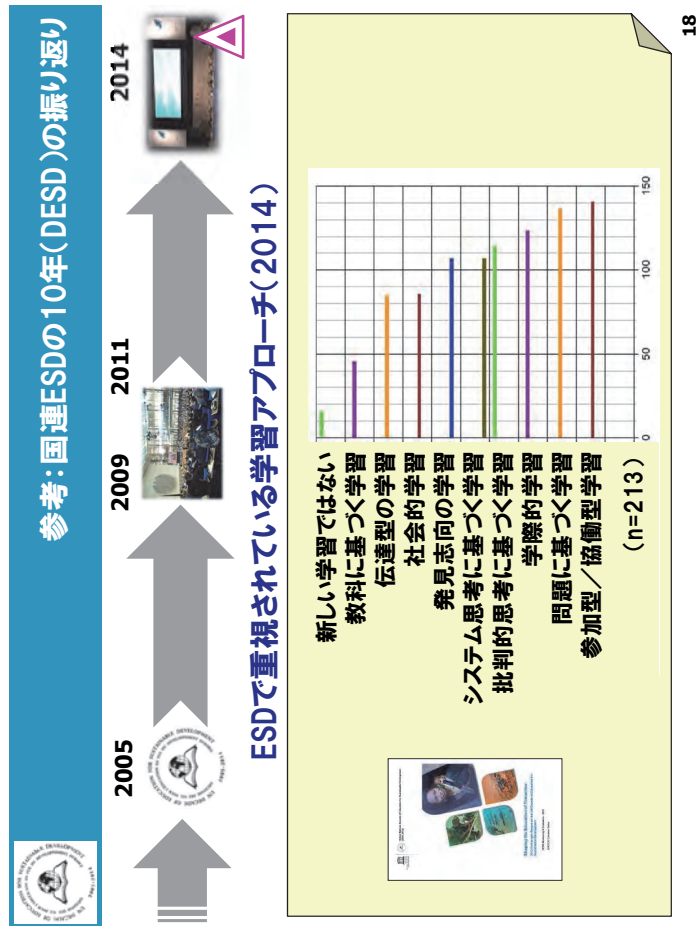
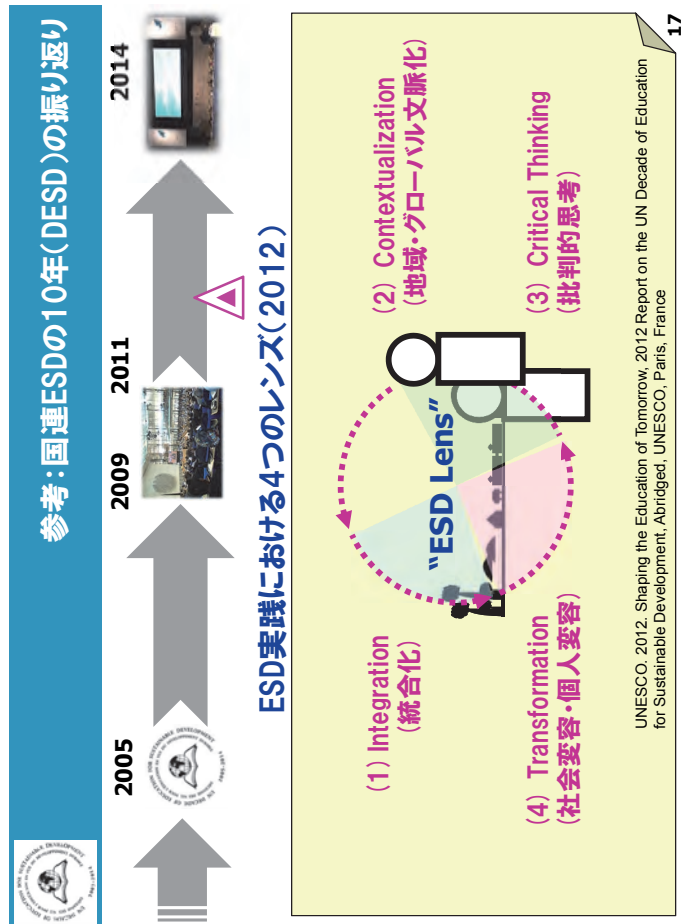


[ESDにおける重要な学習]

- ・ 批判的な質問の投げかけ
- ・ 自分の価値観を明確化
- ・ より積極的で持続可能な未来像を描くこと
- ・ 体系的な思考
- ・ 応用的学習による対応
- ・ 伝統と革新の間に見られる論理体系の構築、などを可能にする学び

UNESCO, 2011. ESD, An Expert Review of Process of Learning

16





参考：国連ESDの10年(DESD)後の取組
～インチョン宣言、SDG4、SDG4.7.

インチョン宣言(2015)

- ・ 2030年までの新しい教育ビジョン(20項目)
- ・ 教育は**基本的人権 (Human Rights)**であることが前提、**すべての人に包摂的 (Inclusive)**で**公正な (Equitable)**質の高い (Quality) 教育の保障と生涯学習の機会を推進(→SDG4)

SDG4.7.(2015)

- ・ 2030 年までに、**持続可能な開発のための教育**及び**持続可能なライフスタイル**、**人権**、**男女の平等**、**平和及び非暴力的文化の推進**、**グローバル・シチズンシップ**、**文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育**を通して、**全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。**

25

参考：持続可能な開発目標 (SDGs)
2016-2030

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



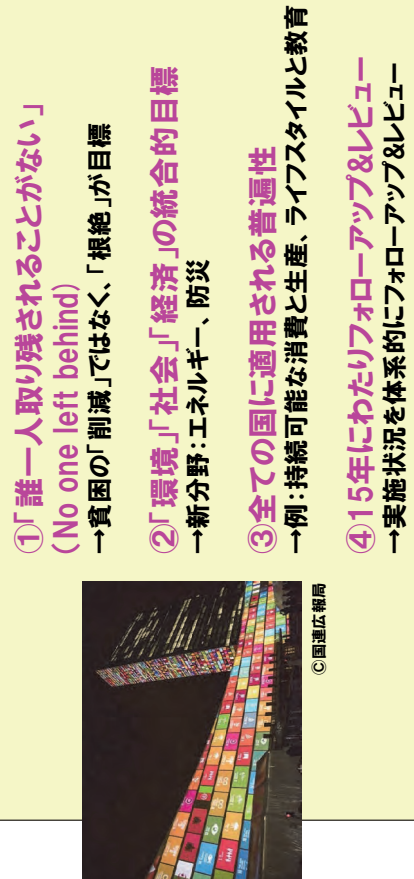
http://www.un.org/activities/economic_social_development/sustainable/2030agenda/ 26

参考：持続可能な開発目標 (SDGs)
2016-2030

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標

SDGsの特徴



28

参考：ミレニアム開発目標 (MDGs) と
持続可能な開発目標 (SDGs)

貧困・社会的排除問題



MDGs(2001-2015)

開発アジェンダ

人権・社会的公正・
開発(経済・社会・人間)

2000年代の状況

貧困、飢餓、HIV/AIDS、南北問題、債務危機、紛争、衛生、水のアクセスと質、非識字、教育のアクセスと男女格差、社会的公正、など

貧困・社会的排除問題 / 地球環境問題



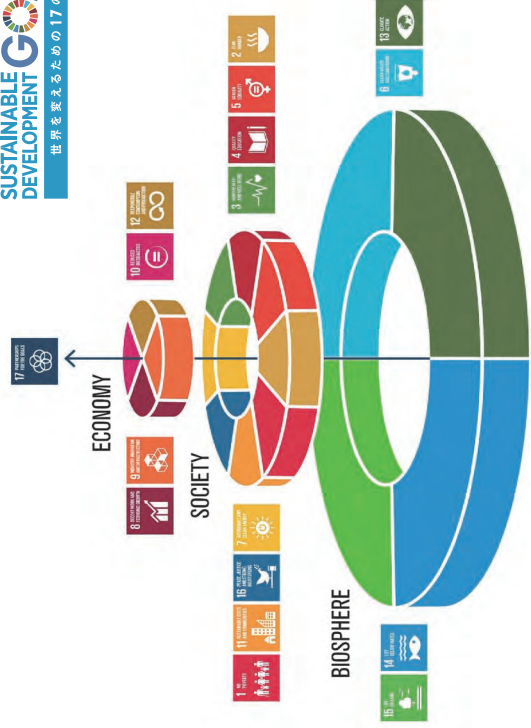
SDGs(2016-2030)

開発・環境アジェンダ

地球資源制約・環境保全・自然生存権・
人権・社会的公正・開発(経済・社会・人間)

今日の状況

気候変動、生物多様性喪失、自然災害、高齢化、エネルギー問題、社会的公正、ガバナンス、肥満、紛争、貧困格差、教育の質、雇用の雇用問題、人工知能に奪われる職、グローバルな金融・経済危機 27



http://www.stockholmresilience.org/images/18_36c25848153d54bda33ec9b/1465905797608/sdgs-food-azote.jpg

29

参考：グローバル化時代の“2つの基本問題”



- People come first
- Poverty reduction, social justice and development are the main priorities
- Environmental and conservation issues are secondary to this
- Conservation of the natural world is the priority
- People can sometimes be the problem
- Development issues and poverty eradication are secondary to this

31

SDGsのもうひとつの捉え方 5つのP



http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/

30

参考：持続可能な社会の実現



北村(2016)

32

持続可能性のパラダイムにおける教育の役割

末本誠（湊川短期大学 学長／神戸大学 名誉教授）

報告者は、2014 年 10 月に岡山市で開かれた「ESD 推進のための公民館－CLC (community learning center) 国際会議」において、基調提案者の一人として登壇した経験をもつ¹。本日このような栄誉な機会を与えられたのも、関係の方々がこの事実の名を向けてくださったからと理解している。発展途上の国々の多かったこの会では学校は ESD のステークホルダーの重要な一部ではあるが、公民館－CLC を主題にした集まりであったために、主要には ESD における公民館－CLC を拠点にした社会教育ないしはノンフォーマル教育 (NFE) の役割を明確にすることを重視する報告を行った。しかし学校に主眼を置けなかったとはいえ、報告の内容は ESD の推進において求められる、教育の在り方全般ないしは新しいパラダイムの構築の必要を問題にしていた。そこで本日は、2014 年の岡山での報告を下敷きにしなが、改めて学校を含む教育全体の在り方として、「持続可能性というパラダイムにおける教育の役割」という本日のテーマに迫る観点を、いくつか提示してみたい。

ちなみに報告者の岡山での提言の論点は、①NFE ないしは公民館－CLC は ESD という課題と親和性が高いこと、とりわけその課題の複雑性が焦点であること、②ESD の推進において NFE や公民館－CLC の特質を積極的に生かすには、教育理解の拡張が必要であること、③以上の観点から公民館－CLC ないしは NFE の現状を見直した場合、何が問題になるのかを具体的に提示することの3つであった。③は本日の議論には不要だが、①と②は関係がある。そこでこの2点を基に、本日の議論において深めるべき課題として重要と思われる観点を整理すると、次の通りである。

1. ESD の複雑性

報告者は ESD において NFE および公民館－CLC が重要な役割を果たすべき理由として、「持続可能性」という問題の複雑性に注目する必要を強調した。ESD が自然環境の問題だけでなく人権や平和、貧困、格差、ジェンダー、文化的多様性など様々な問題から構成される複合的な課題であるということは、今日、SDGs がこの課題の解決を 17 という多数の項目に置き換えてその推進を提起したことにも示されている。「持続可能性」は、単一の原因が単一の結果に結びつくという単純な事柄ではなく、多様な要因が多様な結果と結びつくというような、複雑系といわれる問題として成り立っている。したがって ESD は、なんらかの学問や科学、客観的な知識がひとつあればこと足りるという、従来の知識観や教育観が通用しない問題であり、人類が、これまでに経験して来なかった性質の問題に、われわれは直面していると考えが必要がある。

温暖化という地球環境の異変についても、その原因が人類による二酸化炭素の排出にあるらしいことは分かっても、その要因や結果は多様であり単一の現象として捉えることはできないだろう。原因たる二酸化炭素の排出の原因には人間の生活の多様な展開があり、結果としての温暖化も多様な現象として現れるからである。このような「持続可能性」という問題のもつ特質は、この議論のリアリティを削ぎ広い関心の広がりや阻害する要因になっている。教育場面で問題の大きさや深刻さを説明することはできても、課題に対する当事者性を意識する動機づけの部分において距離感や縁遠さが生まれることは、しばしば経験されると

¹ この報告の全文は、日本公民館学会の年報に収録されている。末本「ESD－公民館・CLC からのアプローチ」『日本公民館学会年報』第 11 号 128-133 頁 (2014)。

ころである。北極上空のオゾン層に穴が開くという事実についても、北極はあまりに遠く実感は乏しい。これも「持続可能性」という課題が、原因と結果の一対一の対応ではない、複数の原因と複数の結果の対応というこの問題の特質の帰結の一部であるように思える。

しかし、こうした「持続可能性」という課題の複雑性は、その課題解決の当事者の多様性と同義である。これまでの論議において、多様な「ステークホルダー」の存在が論議されてきたのは周知のところである。複雑性とは人間の生活場面において「持続可能性」問題の出現、ないしはその課題を示す現象が多様に存在するということでもある。人々は「持続可能性」という大きな問題の全体は、その複雑性がゆえに把握できなくても、その表現である現象には気づいており、それへの対応も始めている。ゼロからの出発ではないことも、ESD の特質の 1 つなのである。報告者が NFE および公民館－CLC 関係者の会議で、ESD におけるその役割の大きさないしは双方の親和性を強調したのも、この領域がまさに多様な教育の担い手の存在を前提にして成り立っているからである。また SDGs が、「持続可能性」の実現に向けた課題を 17 の項目に整理したことも、こうしたこの課題の複雑性への対応として不可避であったとともに、唯一有効と考えられる手順であったものと推測する。

ところで、こうした課題の複雑性を前提にした ESD の推進を検討しようとする場合、複雑性との直面という課題が、今日の学問全体および教育全体のパラダイムの転換と関係している点に、注目する必要があるだろう。たとえば E.モランは科学の科学(認識論)の可能性を論じながら、「科学のこの驚異的な発達とは、同時に反面では、無知の驚異的な発達でもある」と指摘し、科学の探究における「秩序と無秩序」の新たな「相互作用」の試みとして、「特異性」「偶然性」「偶発性」「還元可能性」「人生体験との同一視」を特徴とする「出来事の復権」を提起している²。学問全体の動向を把握する能力を報告者が持たないが、少なくとも教育学ないしは社会教育研究の問題としては思い当たる部分があり、実際にささやかながら「ローカルな知」という課題と向き合う研究に従事してきた。モランの言うように、従来の科学が「秩序と無秩序」を関係づけることに努力しながら、現在は一般性(前者)だけが重視されて偶発性が軽視されているという指摘は、ESD という観点から注目すべき点であるように思われる。「持続可能性」という問題はその複雑さがゆえに、従来の科学の一般性が必ずしも通用しない、モランの言う「無秩序(カオス)」に他ならないと考えられるからである。

こうした新たな教育的パラダイム理解の一例として、報告者が神戸大学在職中に取り組んだ試みを紹介する。報告者は、当事 11 あった学部 of 7 学部をつないだ ESD 関連の教員集団のまとめ役を果たした経験をもつ(～2015)。こうした取組をするに至った理由は、この教育では事象解明を専門とする何らかの担当学部を選べばよいというわけではなく、複数の学部が共同して取り組む学際的な新たな知の創造が求められていると考えたからである。「持続可能性」という問題は複雑であるがために、その全貌を単独で解明する学問はまだ存在しない。しかし大学は部分的な知の探究には取り組んできており、その成果も様々な研究領域で蓄積されてきている。それらを結びつける総合的な知の創造過程に、ESD を位置づけることが必要であると考えた結果であった。この原理は大学での ESD に限定されるものではない。

以上、長い説明になったが、多様な問題が複合して成り立つ「持続不可能」な現実に取り組む ESD では、「持続可能な社会づくり」という目的を共有しながら、その実現に向けて、多様な当事者同士が出会い、交流し、互いの課題を共有し合いながら、相互に経験や知識を交流、交換し、総合的な「実践知」を作り上げられていくこと、ないしは学校教育の過程を通じて子供たちにそのような資質と能力を育てていくことが求められているのである。

² E・モラン『意識ある科学』村上光彦訳 法政大学出版局 1988。

2. 教育理解の拡張

岡山の会議で2つ目に取り上げたのは、このような「持続可能性」および ESD の特質を踏まえると、教育理解の拡張が求められるという点である。モランの言葉を借りて科学の「秩序と無秩序」のかかわり、ないしは一般性への傾斜への批判的観点を紹介したが、これを教育の世界に置き換えれば、それは現在の学校教育とりわけ知識伝達型の教育に対する批判になる。ここでいう教育理解の拡張は、直接的には現在まで学校というシステムが歴史的に構築してきた、体系だった知識の伝達という機能の見直し、その意味でのパラダイムの転換を指す。もとより ESD において、客観的な知識を子供らに伝えることは基本的な教育の役割として重要であることはいうまでもないが、この点については次に述べる。

報告者は従来、NFE や社会教育ないしは成人教育という、おもに学校外で行われる教育の世界を対象とする研究に従事してきた。したがって教育理解の拡張という場合、その前提にこうした領域で問題にする教育・学習活動が存在することは事実である。しかし、フォーマル教育とノンフォーマル教育という二者択一的領域論は、ここでの議論にはふさわしくない。このような議論の国際的、歴史的背景には、前世紀後半に始まったフレイレやイリッチらによる学校制度の批判的な捉え返し、学校の認識論の展開が存在していることに目を向ける必要があるだろう。穿たたいい方になるが、ESD は伝統的な教育論自体の変革を求めているというべきではなかろうか。

たとえば 1985 年に公表されたユネスコの「学習権宣言」で述べられている、「学習活動は(...)人々を、なりゆきまかせの客体から、自らの歴史をつくる主体にかえていくものである」とする理念は、ESD ないしは SDGs の視点として改めて思い起こしてみるべき教育的観点であるだろう。またその冒頭に述べられている「学習権とは、読み書きの権利であり、問い続け、深く考える権利であり、想像し、創造する権利であり(...)」という一説は、「学習」の多様な展開を介して「教育」そのものについての、新たな理解を提示していることにも注目すべきである。そこで強調されているのは、問題解決に結びついた教育のありかたおよび問題解決の当事者性の育成という教育の課題である。

余談に属することではあるが、再び前任の大学での私の経験を紹介すると、さっきも申しあげた通り 11 ある学部のうち 7 つの学部が ESD に加わるようになったのだが、そのプロセスには多くの困難があった。このように ESD を学内に広げる場合に障害になったのが、ESD の E、つまり「教育」という言葉、ないしはその理解の仕方なのである。多くの人は、通常、「教育」という言葉を聞くとすぐに学校や先生、教室や教科書のことを思い浮かべてしまう。そのため、教育の話ならもともと教育に関係のある、私が所属した発達科学部という学部が担当すればいいのではないか、わざわざ関係のない学部に話をもってくる必要ななかろうということになってしまったのである。固定化した「教育」のイメージが、ESD への取り組みを邪魔しているのである。

報告者の経験では、成人教育とりわけ成人の学習に関する研究の国際的な進展の中で、教育観を広げる議論はこの間、特段に進んでいる印象がある。教育課程の縛りから自由な成人教育には、それが可能な条件があるのだが、「行動による学び」や「自ら気づく」という学び、省察的学習と呼ばれる「経験を基にした自己の再構築」を学びととらえる理論など、学校型の教育モデルを克服しようとする新しい理論が生まれている。また教育的な職員論についても、「触媒」や「伴走」「コーディネート」など学校の教師とは異なる、学習の支援者としての新たな役割や教育的役割を果たす職員の領域的な広がりが注目を集めている。こうした議論の意味を成人教育だけに限定するのではなく、学校に返すことによって成人教育においてとは異なる、新しい議論を学校教育の中に巻き起こすのではなかろうか。

学校の基本的な役割が体系だった知識の伝達にあることは疑えないが、次に述べるように、その方法は変えていくことが可能であるように思える。ESD における地域のステークホルダーの一員として学校を位置づける観点や、地域住民として SDGs に取り組む教員の役割などはすぐに思いつく事柄である。

3. 「危険社会」の主体形成

最後に、学校教育のなかに「持続可能性」の実現に必要な教育的パラダイムの転換を、どのように取り入れ具体化するかについて触れてみたい。報告者は学校教育の実践や研究について十分な知識を持たないため、的外れなことを申し上げるかもしれないが、①と②とで指摘した NFE や社会教育、あるいは公民館—CLC という教育施設の実践を基軸にした場合の問題提起として、理解していただければ幸いである。

最初に確認しておくべき事柄は繰り返しになるが、「知識基盤社会」と言われる現代社会においては基本的に、自分を超えたはるかに大きな世界の理解に客観的な知識の習得が極めて重要な意味を持つということである。地球環境の異変やアフリカなどでの貧困、中東での戦争下の人々の暮らしなどは、映像で一部知ることはできるものの、その深い理解には自然科学の知識や地理、歴史などの客観的な知識が不可欠である。

『危機社会』の中で、ベックは「近代化に伴う危険は科学的知識に依存する」と指摘しつつ、「危険を危険として『視覚化』し認識するためには、理論、実験、測定器具などの科学的な『知覚器官』が必要である」と述べている³。ESD を、各教科を貫く基本的視点として位置づけ、知識の獲得を通して「持続可能性」や SDGs という課題の存在を子どもたちに知らせることは、学校が果たし得るもっとも重要な貢献といえるだろう。

ところが一方でベックは、危険が今述べたように「数値や数式の形で提示される」とことと知識の重要性を強調しながら、続けて「危険の存在自体を信じるが必要になる」と指摘し「どのように生きたいのか、という古くて新しいテーマが浮上してくる」とも述べている。つまり彼の言う「危険社会」は理解するだけでなく、知識を介した認識の対象となって初めて意味を持つのである。ここで危険の存在を「信じること」や「どのように生きたいのか」という、すぐれて主観的な要素が強調されていることは、学校ないしは教育の課題を知るうえで重要である。ESD においては、客観的知識を自己の内面に移し替え、価値観や生活態度の中に溶かし込むことが必要なのである。

こうした課題に応える学校教育の役割を再発見するうえで、成人教育の領域で議論されている J.メジローの教育観——「道具的教育」「対話的教育」「省察的教育」という「3 つの教育」——やそれを支える「意味枠組み」および「意味パースペクティブ」などの議論は、学校教育の観点からも注目する必要があるように思われる⁴。2 番目の「対話的教育」や 3 番目の「省察的教育」を学校教育の中に取り入れることは、十分に可能なものではなかろうか。とりわけ「対話的教育」において作用する間主観的な「蓋然的知識」は、向き合う者同士の対話を通じた徹底した情報の共有と議論から生まれる「仮説」の出現を想定しているが、この「仮説」はその「検証」という「行動」をすぐ次の段階に用意している。つまり学校を念頭に考えられる「道具的な知識」が、体系だった知識の法則化による課題解決(解決の型の伝授)を想定しているのに対して、「対話的教育」における「蓋然的知識」は未完の開かれた知識としてその実地の有効性を、不可避免的に担保するのである。こうした「やってみる(試してみる)」という世界を、教育課程に縛られた学校は不得手とするだろう。しかし当事者性や行動力を育てるのは、こうした「試し」によって身体的に獲得される知識ではなかろうか。こうした「試し」の前提に、まず客観的知識の獲得が必要ではあるが、その成果をテストによる評価で閉じてしまわずに開くこと、ないしは問いが開かれたままにすることが大切ではなかろうか。

また「意味枠組み」および「意味パースペクティブ」の転換として知られる 3 番目の「省察的教育」も、知識を理解する認識の深さを求める方法として有効であるように思われる。ベックの言う、「危険社会」の存在を知るために必要な「信じること」や「生きたいと願う」という行為は、どこから生まれるのか。それが知識の伝達では困難であることは、明らかだろう。自分の人生を振り返り、言語化することを通じて自己の人生の意味を知る、ライフストーリー

³ ベック『危険社会』東廉・伊藤美登里訳 35～36 頁 法政大学出版 1998。

⁴ J. Mezirow, A Critical Theory of Self-Directed Learning, S.Brookfield, Self-Directed Learning, Jossey-Bass, 1985 pp.17-21

一を教育の方法として応用することなどによって果たされる「省察的教育」は、人生経験の浅い低学年の子供には不向きかもしれないが、いずれの年代の者にも彼ら、彼女らが経てきた人生の年月及び経験はあるはずであり、過去の経験と向き合うことによって自分が内在化している価値(社会)の意味を、自ら見出すことはできるはずである。

MEMO

ESD推進における 国連大学の役割

2018年 3月3日 東京

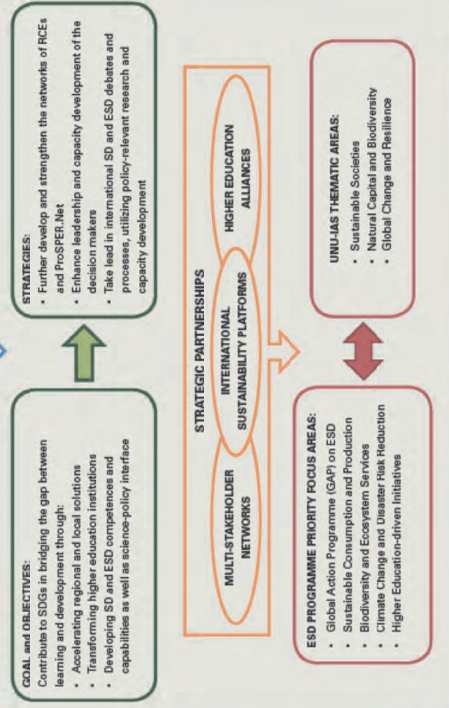
国連大学サステイナビリティ高等研究所
プロジェクト・ディレクター 塚本直也

ESDプログラムとRCEの背景

- ▶ 国連大学サステイナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) は、「国連 持続可能な開発のための教育の10年 (DESD)」に向けた国連決議に対応すべく、環境省の財政支援により、2003年にESDプログラムを開始。
- ▶ 主な目的
 - ESD原則のアドボカシーと普及
 - ESDに関する地域拠点 (RCEs) の推進
 - 高等教育機関のESD活動の強化 (ProSPER.Net)

ESD PROGRAMME STRATEGIC FRAMEWORK

Post-2015 Development Agenda and Sustainable Development Goals (SDGs)



ESD推進における 国連大学の役割

- ▶ 1. ProSPE.net が提供する様々な機会
- ▶ 2. Development of the RCE network
- ▶ 3. RCEネットワークの戦略とロードマップ
- ▶ 4. RCEネットワークとSDGs

ProSPER.Netとは?

ProSPER.Net:

Promotion of Sustainability in Postgraduate Education and Research Network,

持続可能な開発を大学院教育に統合することを目指す
アジア太平洋の主要大学のネットワーク



2008年G8 北海道洞爺湖サミットの機会に設立

5

Members of ProSPER.Net

As of July 2017, there are 40 members in the network.



ProSPER.Net Members

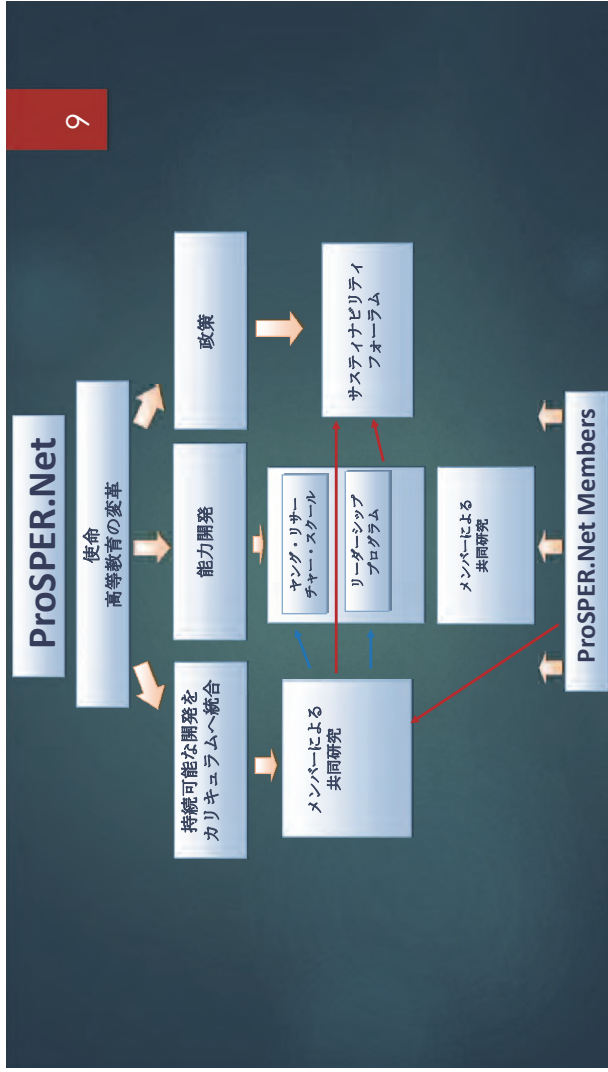
- Queensland University of Technology, **Australia**
- RMIT University, **Australia**
- Griffith University, **Australia**
- Western Sydney University, **Australia**
- Chinese Academy of Sciences, **China**
- Tongji University, **China**
- TERI University, **India**
- Universitas Indonesia, **Indonesia**
- Universitas Gadjah Mada, **Indonesia**
- Universitas Andalas, **Indonesia**
- Institut Teknologi Bandung, **Indonesia**
- Universitas Pendidikan Indonesia, **Indonesia**
- Chubu University, **Japan**
- 北海道大学, **Japan**
- 法政大学, **Japan**
- 岩手大学, **Japan**
- 慶応大学, **Japan**
- 宮城教育大学, **Japan**
- 名古屋大学, **Japan**
- 岡山大学, **Japan**
- 立教大学, **Japan**
- 信州大学, **Japan**
- 東北大学, **Japan**
- 東京大学, **Japan**
- 横浜国立大学, **Japan**
- Universiti Sains Malaysia, **Malaysia**
- Universiti Teknologi Malaysia, **Malaysia**
- University of the Philippines, **Philippines**
- Ateneo de Manila University, **Philippines**
- Yonsei University, **Republic of Korea**
- Nanyang Technological University, **Singapore**
 - Nanyang Environment and Water Research Institute, **Singapore**
- University of Peradeniya, **Sri Lanka**
- Chulalongkorn University, **Thailand**
- Prince of Songkla University, **Thailand**
- Mahidol University, **Thailand**
- King Mongkut University of Technology Thonburi, **Thailand**
- Vietnam National University, **Vietnam**
- Asian Institute of Technology, **Regional**
- East-West Center, **Regional**
- University of South Pacific, **Regional**

(40 members as of July 2017)

7



8



- ProSPER.Netが提供するopportunity
1. 年1回の総会とSDフォーラム
 2. メンバー間の共同研究への補助
 - 。カリキュラム開発、マテリアル作成など
 3. リーダーシップ・プログラム
 - 。ポストドク、社会人による切磋琢磨の機会
 4. ヤング・リサーチャー・スクール
 - 。博士課程の学生を対象とした課題解決型研修
 5. モビリティ・プランへの支援
 6. イベント共催によるSDへのコミットメント

- 11
- ## リーダーシッププログラムの魅力
- ▶ 2017年 6月29日～7月4日
 - ▶ チュラロンコン大学開学100周年を記念
 - ▶ 多彩な参加者（○カ国、○○人）
 - ▶ 研究者、民間企業、政府機関
 - ▶ 強力な講師陣
 - ▶ 国連大、ホスト大学の実力、ビジネス
 - ▶ 現場における実践的学習
 - ▶ 港湾開発と環境保全の現場、NGO
 - ▶ 持続可能な街づくり・市長との対話
 - ▶ 地域コミュニティの緑化の取組み

- 12
- ## ヤング・リサーチャー・スクールの魅力
- ▶ 2017年3月6日～15日
 - ▶ ベトナム国立大学（Ho Chi Minh City）
 - ▶ 2017年のテーマ：水の安全保障
 - ▶ SDに関心のある博士課程大学院生の交流
 - ▶ （9カ国、16名、11大学）
 - ▶ 経験豊富な講師陣、専門に強いホスト大学の教授陣、
 - ▶ Research Communication Skillsの養成、
 - ▶ 3 minute thesis presentationの実施
 - ▶ 現地視察（洪水対策施設、メコンデルタ）
 - ▶ 現場での専門家とのディスカッション

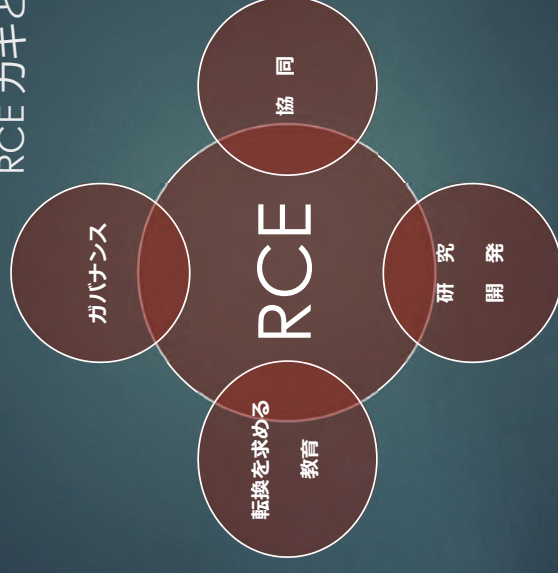
ESD推進における 国連大学の役割

13

- ▶ 1. ProsPE.net が提供する様々な機会
- ▶ 2. Development of the RCE network
- ▶ 3. RCEネットワークの戦略とロードマップ
- ▶ 4. RCEネットワークとSDGs

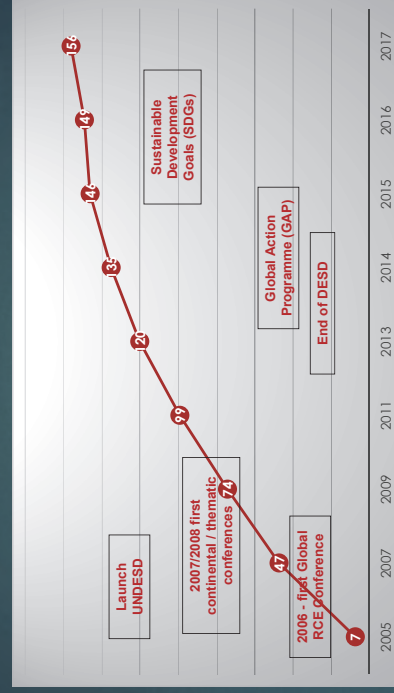
RCE カギとなる要素

14



Acknowledged RCEs

15



2003 ESD Programme at UNU-IAS launched
2004 RCE Concept developed



16

RCE 関連活動

17

- ▶ RCEが様々なレベルで集まり、ベスト・プラクティス（優良事例）を共有
 - ▶ **国内**：例）イギリス、ドイツ、日本の国内RCE会合
 - ▶ **地域**：アフリカ大陸、南北アメリカ大陸、アジア太平洋地域、ヨーロッパのRCE会合
 - ▶ **世界**：世界会議には全てのRCEが参加
 - ▶ **課題別**：特定のテーマについて活動するRCEが集まり、ベスト・プラクティスを共有し方向性について議論

2. 2017年のこれまでの主な活動 (2017年2月～11月)

18

2月22日	国内RCE実務者会議	日本・名古屋
3月6-10日	UNESCO Global Action Programme (GAP) ・レビュフォーラム	カナダ・オタワ
7月24日	UNU-IASと生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム (IPBES) の新たな協力合意を締結（署名式）	日本・東京
8月2-4日	アフリカ大陸RCE会議	ザンビア・ルサカ
9月8-9日	ヨーロッパ大陸RCE会議	ドイツ・ドルトムント
9月13-15日	アメリカ大陸RCE会議	カナダ・バンクーバー
11月2-4日	アジア太平洋地域RCE会議	インド・デリー

2017-2018年の主な活動予定

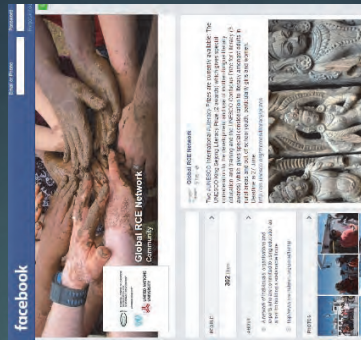
19

12月4日	第12回ウブントウRCE審査委員会	日本・岡山
12月5-7日	SDGsの達成に向けたRCE第一回世界会議	日本・岡山
TBC	アフリカ大陸RCE会議	TBC
TBC	アメリカ大陸RCE会議	TBC
TBC	ヨーロッパ大陸RCE会議	TBC
TBC	アジア太平洋地域RCE会議	TBC

その他のRCE 活動

20

- ・ 課題別ワーキンググループ（継続）
 - ・ 生物多様性 (CBD COP 13 に参加 - 2016年12月)
 - ・ 気候変動 (グライメート・チャンス会合に参加 - 2016年9月)
 - ・ 防災・減災
 - ・ 高等教育
 - ・ 持続可能な消費と生産
 - ・ ユース
- ・ GAP 会合、ワークショップ
- ・ IPBES 研修ワークショップ
- ・ ユース（若手メンバー）連絡窓口
- ・ 南米アメリカ/アジア太平洋アクションプラン
- ・ RCE アワード



<http://www.rcenetwork.org>

<https://www.facebook.com/Global-RCE-Network-890558397679571/>

- Issued monthly
- Upcoming ESD-related Events
- Latest News
- Invitations for collaboration
- New Publications and Resources
- Created a template for RCEs to submit an article to the bulletin



RCE Publications

ESD推進における 国連大学の役割

- ▶ 1. ProSPE.net が提供する様々な機会
- ▶ 2. Development of the RCE network
- ▶ 3. RCEネットワークの戦略とロードマップ
- ▶ 4. RCEネットワークとSDGs

Road map of RCE network (2016-2020)

25

▶ Strategy 1

RCEコミュニティ内でのESD・SD活動の調整を向上させるための
のガバナンスの強化

▶ Strategy 2

地域的な或いは世界的な持続可能な開発に貢献するステークホルダーに対する能力開発の向上

▶ Strategy 3

地域におけるESD・SDに係る議論と国際的なプラットフォームでの議論との連携強化によるRCE活動の影響力の強化

IPBESとの連携

International Platform on Biodiversity and Ecosystem Services

26

□ 2017年の7月国連大学サステイナビリティ高等研究所は、生物多様性条約及び生態系サービスに関する政府間プラットフォーム (IPBES) との間で協力強化を合意

□ サステイナビリティ高等研究所の様々な活動を通じて、IPBESの成果物を現場で活動するステークホルダーに普及

□ RCEネットワーク

□ ProSPer.net

□ 里山イニシアティブ国際プラットフォーム (IPSi) や、

□ 教育、研究活動

□ 逆に、地域コミュニティや少数民族がもっている固有の知識や、現場での活動から得られた経験知をIPBESにインプット



持続可能な開発のための教育に関するグローバル・アクション・プログラム (GAP)²⁷

- ▶ 持続可能な開発のための教育に関するユネスコ世界会議で開始 (2014年11月)
- ▶ 国連ESDのフォローアップとして第69回国連総会で採択(2014年12月)
- ▶ オタワにて中間レビュー(2017年3月)

全体目標:

持続可能な開発に向けた前進を加速していくため、**全レベル・領域の教育と学習**における行動を起こし、スケールアップする(持続可能な開発に「**についての**」ではなく、持続可能な開発の「**ための**」教育)

目的:

- 1) 教育と学習の方向の再設定 (**教育アジェンダへのESDの統合**)
- 2) 持続可能な開発を推進する全てのアジェンダ、プログラム、および活動における教育・学習の強化 (**開発アジェンダへのESDの統合**)

GAP 優先活動分野

28

1. 政策の推進

2. 学習・トレーニング環境の転換

3. 教育者・トレーナーの能力強化

4. 若年層のエンパワメントと動員

5. 地域レベルでの持続可能な解決策を促進

RCE Youth Network

Facebook - Global RCE Youth Network



29

Youth Focal Point

- ▶ 2016年の第11回ウェブントウRCE審査委員会で【Youth Focal Point】の設置が承認される
- ▶ 目的：RCE間でのYouthのネットワークの促進、情報交換

30

Youth Focal Pointへの条件

- ▶ RCE内で活躍する16歳～35歳のユース
- ▶ 国内や海外のRCEのユースと積極的にコミュニケーションをとる意欲があること
- ▶ 2年間の任期を全うできること

Youth Focal Point選出済の

国内RCE

- ▶ RCE中部
- ▶ RCE北九州
- ▶ RCE岡山
- ▶ RCE横浜

※まだ選出されていないRCEからのご連絡お待ちしております！

ESD推進における 国連大学の役割

- ▶ 1. ProsPE.net が提供する様々な機会
- ▶ 2. Development of the RCE network
- ▶ 3. RCEネットワークの戦略とロードマップ
- ▶ 4. RCEネットワークとSDGs

31

The Sustainable Development Goals (SDGs) ~ 2015-2030



32

SDGsの達成に向けたRCE第一回世界会議

33

日時： 2017年11月5-7日 於： 岡山・日本
主催： RCE岡山、UNU-IAS



- AP RCE Meetingと同じ3つのテーマ「生物多様性」、「気候変動」、「持続可能な消費と生産」に焦点を当てた会議
- 世界各国のRCEから、上記テーマを専門とする60名以上が参加予定
- 上記テーマのキャパシティビルディング・ワークショップの実施予定
- 岡山県内でのフィードバックの実施予定

Potential Synergies among SDGs

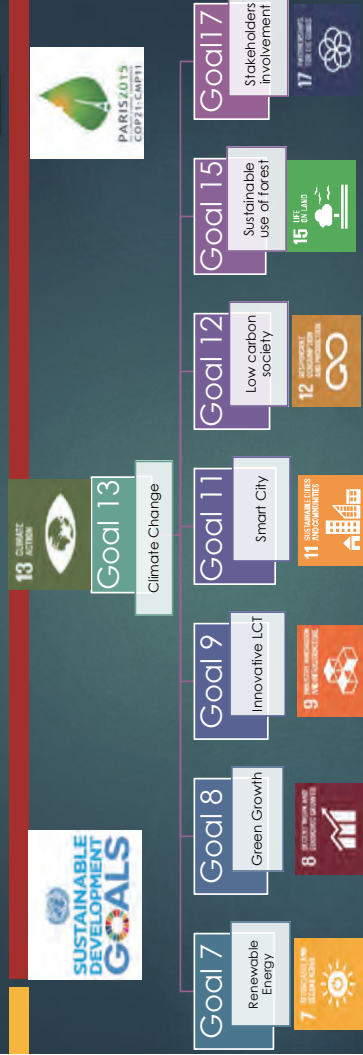
34



<http://in.one.un.org/sdg-wheel/>

Example: SDGs and Climate Change

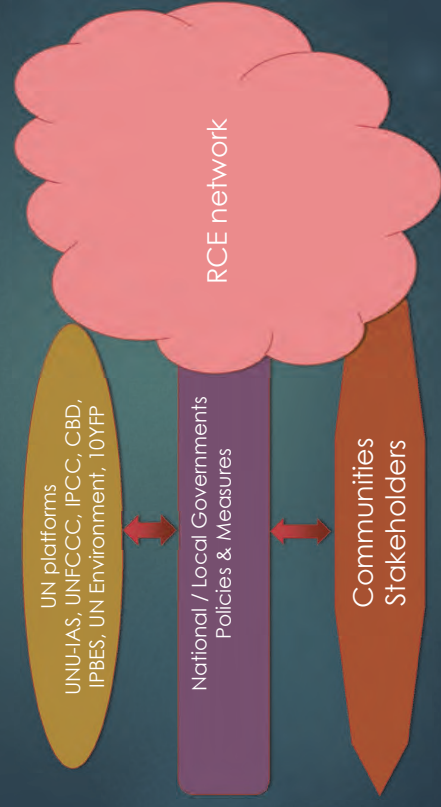
35



Goal 13 for Climate Change is **mutually supportive** with many other goals through mitigation and adaptation.

Think Globally based on Local experience
Act Locally in linkage with Global agenda

36

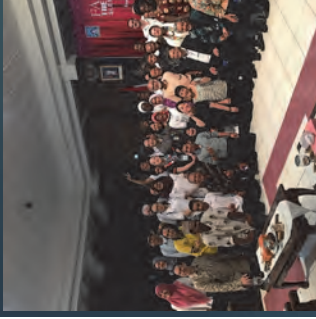


結論

37

- ▶ 1) 教育は、SDGsの一つの目標（目標4：質の高い教育をみんなに）であると同時に、他の16の目標を実現するために、必要不可欠な要素である。
- ▶ 2) RCEは、地域コミュニティにおいて「持続可能な開発のための教育」を推進するための理想的なデザインと機能を有している。
- ▶ 3) SDGsの17の目標は互いに密接に関連している。それぞれのRCEが得意なテーマを出発点として、その実現に向けた活動を創意工夫しつつ進めることで、17すべての目標の達成に貢献することが可能である。
- ▶ 4) RCEとRCEネットワークは、地域レベル、現場レベルでの活動と国際的なアジェンダとの連携を図る上で、ユニークな優位な立場にある。

Thank you!



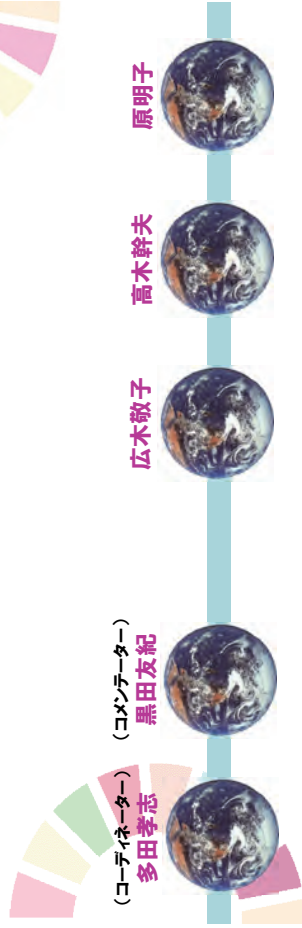
38

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム
—ESDの実践と研究の有機的連携にむけて—

第一部：教育の質の向上とESD-

《パネル・ディスガッシオン》

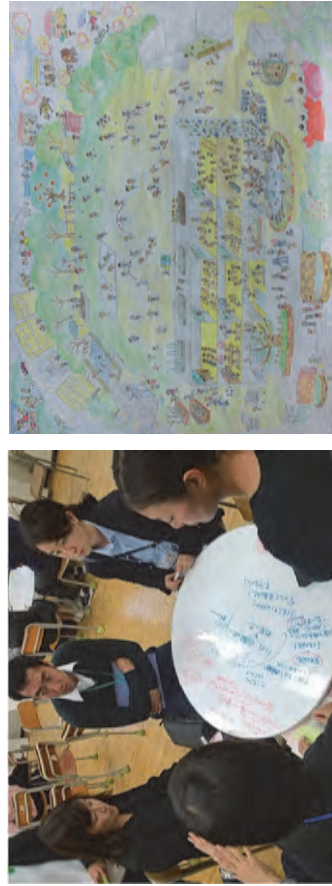
14:50-16:00



2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

1

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム

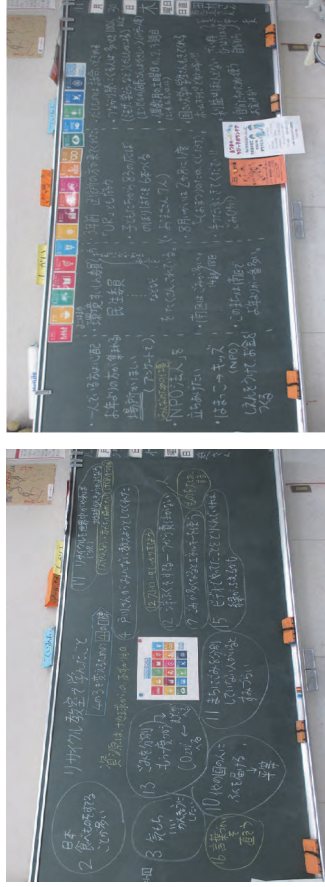


《取組紹介：広木敬子》

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

3

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム
—ESDの実践と研究の有機的連携において—



《取組紹介：広木敬子》

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

2

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム



《取組紹介：高木幹夫》

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

4

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム
— ESDの実践と研究の有機的連携にむけて —

太郎君はお父さんと一緒に千葉の習志野市にある
谷津干潟(写真)に自然観察に来ました。



【問1】お父さんは干潟がなくなっていくことに危機感を抱いています。
昔から干潟は干拓され、農地化されました。高度経済成
期には多くの干潟がうめ立てられ、農地となりました。どうし
て干潟は干拓されやすいのか、その理由を答えなさい。

【問2】干潟を守る上で何が重要か、あなたの考える
「干潟の保護」を1行で述べなさい。

未来をつくる
私学の学び
シカクイ
アルファを
マルくする。

成蹊中学校
中学入試問題
2017年(理科)

干潟・SOS!

干潟問題は環境問題として知られているが、小学生にとって社会の一部、社会が抱える問題を自ら考えて解決しようとする意識を育てることは、SDGsの目標13「気候変動に具体的な対策を」を達成し、私学が社会に貢献する一環として取り組まなければならない。

問題の解答・解説や見どころ、
出題意図やインタビューを、
公式ウェブサイトにて！

私学の学びを促進する環境 田中先生が、
SDGsの目標13「気候変動に具体的な対策を」を達成し、私学が社会に貢献する一環として取り組まなければならない。

日能研 環境問題 干潟・SOS!

日能研 環境問題 干潟・SOS!

日能研 環境問題 干潟・SOS!

《取組紹介：高木幹夫》

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

5

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム
— ESDの実践と研究の有機的連携にむけて —



《取組紹介：原明子》

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

7

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム
— ESDの実践と研究の有機的連携にむけて —



《取組紹介：原明子》

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

6

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム
— ESDの実践と研究の有機的連携にむけて —

— 第二部：教育の質の向上とESD —

14:50-16:00 《パネル・ディスカッション》

Q2-1 [創意工夫・課題]:

教育・学習の質の向上のために

どのような創意工夫をしてきたか？その課題は何か？

(コーディネーター)
多田孝志

(コメントーター)
黒田友紀

広木敬子

高木幹夫

原明子



2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

8

— 第二部：教育の質の向上とESD —

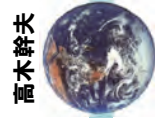
14:50-16:00 《パネル・ディスカッション》

Q2-2 [変容・刷新]:

ESD実践により、どのような変容
(学習者、教育者、組織、社会など)や
刷新が見受けられたか?

(コーディネーター)
多田孝志

(コメンテーター)
黒田友紀



原明子

高木幹夫

広木敬子

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

9

— 第二部：教育の質の向上とESD —

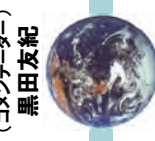
14:50-16:00 《パネル・ディスカッション》

Q2-3 [知見蓄積・活用]:

ESD実践を通してどのような知見が得られ、
課題の克服にむけてどのように(関係者の意識向上、
実践改善、指導技術向上など)活かしているか?

(コーディネーター)
多田孝志

(コメンテーター)
黒田友紀



原明子

高木幹夫

広木敬子

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

10

— 第二部：教育の質の向上とESD —

14:50-16:00 《パネル・ディスカッション》

Q2-4 [これからのESD]:

SDGs×ESD—その可能性と展望

“出口の(見え)ない教育・学習”、
“主體的・対話的・協働的な学習”の意義

(コーディネーター)
多田孝志

(コメンテーター)
黒田友紀



原明子

高木幹夫

広木敬子

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

11

— 第三部：持続可能な開発／SDGsとESD —

《パネル・ディスカッション》

16:20-17:30

(コーディネーター)
湯本浩之

(コメンテーター)
見上一幸



三隅桂子

河野晋也

長澤恵美子

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

12

「SDGsとESD」特別企画画シンポジウム

－ESDの実践と研究の有機的連携にむけて－



《取組紹介：三隅桂子》

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

13

「SDGsとESD」特別企画画シンポジウム

－ESDの実践と研究の有機的連携にむけて－



《取組紹介：河野晋也》

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

15

「SDGsとESD」特別企画画シンポジウム

－ESDの実践と研究の有機的連携にむけて－



《取組紹介：三隅桂子》

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

14

「SDGsとESD」特別企画画シンポジウム

－ESDの実践と研究の有機的連携にむけて－



《取組紹介：河野晋也》

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

16

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム
—ESDの実践と研究の有機的連携—

《取組紹介：長澤恵美子》

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム
—ESDの実践と研究の有機的連携にむけて—

《取組紹介：長澤恵美子》

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム
—ESDの実践と研究の有機的連携にむけて—

《取組紹介：長澤恵美子》

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

「SDGsとESD」特別企画シンポジウム
—ESDの実践と研究の有機的連携にむけて—

—第一部：持続可能な開発／SDGsとESD—

《パネル・ディスカッション》

16:20-17:30

Q3-1「協働と学び合い・課題」:

「多様で複雑な問題」の解決にもつて、

様々な主体とどのような取組をし、

学び合いをしてきたか？その課題は何か？

(コーデイナー) (commentator)

湯本浩之

目上—幸
(コメンター)

物平, 日凡

三隅柱

河野晉也

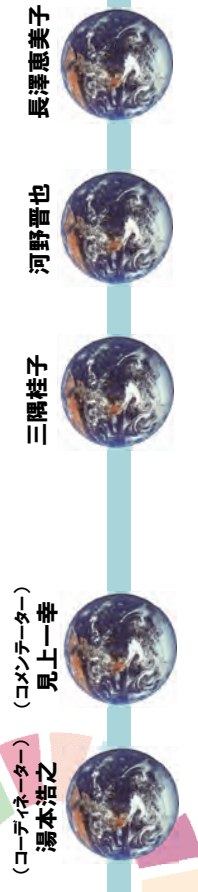
長澤惠美子

— 第三部：持続可能な開発／SDGsとESD —

16:20-17:30 《パネル・ディスカッション》

Q3-2 [変容と刷新]:

ESD実践により、どのような変容
(社会、組織、実践者など)や刷新が見受けられたか？



2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

21

— 第三部：持続可能な開発／SDGsとESD —

16:20-17:30 《パネル・ディスカッション》

Q3-3 [知見蓄積・活用]:

ESD実践を通して、どのような知見が得られ、
課題の克服にむけてどのように(関係者の意識向上、
実践改善、協働の仕組み構築など)活かしているか？



2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

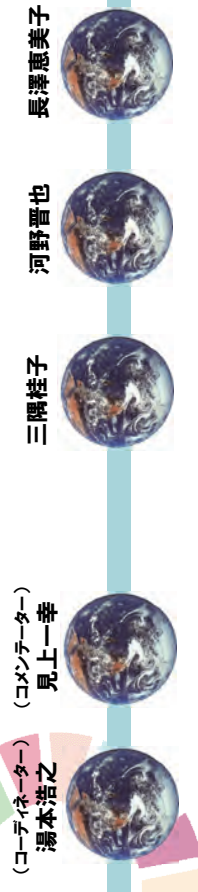
22

— 第三部：持続可能な開発／SDGsとESD —

16:20-17:30 《パネル・ディスカッション》

Q3-2 [変容と刷新]:

ESD実践により、どのような変容
(社会、組織、実践者など)や刷新が見受けられたか？



2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

21

— 第三部：持続可能な開発／SDGsとESD —

16:20-17:30 《パネル・ディスカッション》

Q3-3 [知見蓄積・活用]:

ESD実践を通して、どのような知見が得られ、
課題の克服にむけてどのように(関係者の意識向上、
実践改善、協働の仕組み構築など)活かしているか？



2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

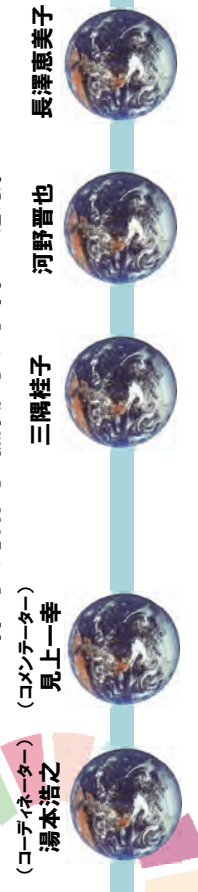
22

— 第三部：持続可能な開発／SDGsとESD —

16:20-17:30 《パネル・ディスカッション》

Q3-4 [これからのESD]:

SDGs×ESD—その可能性と展望
“出口の(見え)ない教育・学習”、
“主体的・対話的・協働的な学習”の意義



2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

23

— 総括 —

《全体協議》

実践・研究をつなぐ:

人と社会の持続可能性の構築にむけて

17:30-17:55

岩本 渉

(アジア太平洋無形文化遺産研究センター所長)

2018年3月3日 @国連大学ウ・タント国際会議場

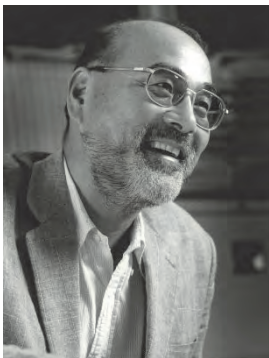
24

— 総合司会紹介 —

《総合司会》

井上美樹(いのうえ みき)愛媛県新居浜市教育委員会 指導主幹

新居浜市内の中学校での教員勤務を経て、2015 年から新居浜市教育委員会学校教育課指導主幹として勤務。新居浜市は全小・中学校 28 校がユネスコスクールとして活動中。その中で、本市が文部科学省補助事業「グローバル人材の育成に向けた ESD 推進事業」の採択を受けた 3 年間、ESD 担当指導主幹として、「ふるさとを愛し、未来を拓く子」の育成を目指して ESD 普及促進に携わる。



《総合司会》

福井昌平(ふくい しょうへい)CI 戦略プランナー／日本 ESD 学会評議員

1946 年、鳥取県生まれ。イベント学会副会長／台湾文化部国際諮問顧問を兼任。「国連 ESD の 10 年」キャンペーンのスタートアップ・プログラムに認定された「2005 年愛知万博（愛・地球博）」のチーフプロデューサーを務めた関係で、多くの市民参加事業の仲間と連携して 2008 年に「ESD の 10 年・世界の祭典推進フォーラム」を組成し、日本における ESD 運動の市民主導型の推進を事務局長として支えた。

— 登壇者紹介 —

主催者挨拶

《主催者》

長友恒人(ながとも つねと) 日本 ESD 学会 会長／奈良教育大学 名誉教授

1943 年生。京都大学工学部原子核工学科卒、同博士課程退学、工学博士。奈良教育大学に助手として採用。広島・長崎、旧ソ連セミパラチンスク核実験場、チェルノブイリの放射線量評価に関する研究の後、文化財・遺跡・遺跡出土遺物の分析及び年代測定法の開発と測定など文化財科学の研究に従事。退職後特任教授の後、学長。学長就任途中から現在まで日本文化財科学会会長。学長退任後、日本 ESD 学会設立準備に奔走、現在、日本 ESD 学会会長、近畿地方 ESD 活動支援センター企画運営委員会委員長等。



《主催者》

渡辺綱男(わたなべ つなお) 国連大学サステナビリティ高等研究所 シニアプログラム・コーディネーター



1978 年に環境庁（当時）入庁。環境省レンジャーとして、全国の国立公園や世界遺産、トキやシマフクロウなどの野生生物保護の仕事に携わる。自然環境計画課長、自然環境担当審議官を経て 2011 年 1 月より自然環境局長。2010 年 10 月に愛知県名古屋市で開催された生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）の準備事務局長を務める。2012 年 10 月より自然環境研究センター、2012 年 11 月より国連大学に勤務。

導入

《導入講演者》

佐藤真久(さとう まさひさ) 東京都市大学 教授

英国サルフォード大学大学院にて Ph.D. を取得。地球環境戦略研究機関 (IGES) 研究員（環境教育・能力開発）、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）のシニア・プログラムスペシャリスト（国際教育協力）を経て現職。現在、国連大学サステナビリティ高等研究所客員教授。日本 ESD 学会理事、ESD 円卓会議委員、東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）-Japan ESD アワード選考委員、GCED 政策立案者向けガイドライン策定委員（UNESCO APCEIU）、横浜市 ESD コンソーシアムにおける ESD コーディネーターなどを務める。国連 ESD の 10 年ジャパンレポートの有識者会議座長、アジア太平洋地域 ESD 国連組織間諮問委員会テクニカル・オフィサー、北京師範大学客員教授（ESD）などを歴任。現在は、協働ガバナンス、社会的学習、中間支援機能などの地域マネジメント、組織論、学習・教育論の連関に関する研究を進めている。



第一部:ESD の経験と到達点

《基調講演者》

末本 誠（すえもと まこと）湊川短期大学 学長／神戸大学 名誉教授



東京学芸大学卒。東京大学大学院教育学研究科博士課程終了後、東京大学助手、神戸大学教授を務めた後、2015年3月に同大学を定年退職。2012年に名古屋大学でPh.D（教育学）取得。2016年から、兵庫県三田市にある湊川短期大学学長。前日本社会教育学会会長。フランスの成人教育史、成人の学習理論、沖縄の集落公民館、生涯学習政策論などの研究に従事。フランス語圏のライフヒストリーを用いた成人教育方法研究会（Ashivif）会員。神戸大学在職中は、11学部中7学部の学生を対象としたESDの運営委員会委員長。2014年10月のユネスコの岡山公民館－CLC国際会議に、基調講演および成果文書作成委員会委員長として参加。神戸大学では、アクションリサーチを応用した学生の実地体験に基づくESDの展開に取り組む。ESDの推進におけるノンフォーマル教育（社会教育）の役割に関心をもつ。

《基調講演者》

塚本直也（つかもと なおや）国連大学サステイナビリティ高等研究所 プロジェクト・ディレクター

1985年東京大学理学部物理学科卒、2005年Johns Hopkins大学環境科学修士。1985年環境庁に入庁。1994年OECD日本政府代表部、2001年世界銀行本部（ワシントンDC）を経て、2005年環境省研究調査室長、IPCC/AR4日本政府代表、UNFCCC適応基金理事会メンバー（理事及び副議長）。2008年環境リスク評価室長：10万人の子供を妊娠期間から12歳まで追跡して化学物質がこどもの健康へ与える影響を解明する「エコチル調査」を立上げ。2010年国際連携課長、UNFCCC適応委員会のメンバー。2013年産業廃棄物課長。2014年IGES事務局長。2016年7月より現職、持続可能な開発のための教育（ESD）、国際SATOYAMAイニシアティブ、低炭素技術移転プロジェクトのプロジェクト・ディレクター。



第二部:教育の質の向上とESD

《第二部コーディネーター》

多田孝志（ただ たかし）金沢学院大学 教授



金沢学院大学文学部教育学科教授、目白大学名誉教授、青山学院大学、立教大学大学院、東京大学、学習院大兼任講師歴任、日本国際理解教育学会元会長、日本学校教育学会元会長、異文化間教育学会名誉会員、国立教育政策研究所「学校における持続可能な発展のための教育に関する研究会」、国立教育政策研究所・JICA地球ひろば共同プロジェクト有識者委員。「教育の真実現場にある」をモットーに、全国各地の教育実践者たちとともに、21世紀の新たな教育の創造を目指した活動に取り組んでいる。（主な著書）『地球時代の教育とは』（岩波書店）、『学校における国際理解教育』（東洋館出版）、共編『未来をつくる教育 ESDのすすめ』（日本標準）、共編『持続可能性の教育』（教育出版）、『グローバル時代の対話型授業の研究』（東信堂）他

《第二部登壇者》

高木幹夫（たかぎ みきお）日能研 代表

1954年生まれ。私学進学を目指す小学生のための学習塾、日能研代表。私学中高一貫教育への進学後も「自ら考え、自分自身を育て続ける」子ども達の育成を目指す。学習塾として、小学6年生が環境や持続可能性をテーマに、仲間と共に考え論述する体験型講座を行う等、多様なアプローチで未来を作る当事者として子ども自身が考える機会を設けている。

RIO+20にむけて2012年に実施した講座では、「The Future We Want」として、子どもたちが「子ども地球市民会議」を経て書きあげた提言を国連に送付した。最近の取り組みでは、小学生に向けて作成した教材「SDGs 2030年までのゴール」冊子が大人にも解りやすいと好評。また、中学入試問題を紹介する車内広告「シカクいアタマをマルくする」シリーズにSDGsのアイコンを入れて発信、広く一般社会に向けて「世界に、未来につながっている今」の意識化を働きかけている。



《第二部登壇者》

原明子（はら めいこ）岡山 ESD コンソーシアム ESD コーディネーター



（財）日本ユニセフ協会勤務を経て、2005年から岡山市のESD推進担当者となる。（環境保全課→ESD 世界会議準備室→ESD 世界会議推進局。）2015年に市役所を退職し、現在はフリーのESDコーディネーターとして岡山市のESDやコンソーシアム事業等に関わっている他、岡山大学環境理工学部で非常勤講師としてESDの授業を担当している。市民活動として、岡山ユニセフ協会の活動の他、日常の延長に自由に意見が言える場がほしいと、2014年から隔週で「おかやま自由学校そら」というゆるやかなしゃべり場を主宰してきた（この1年休会中）。また2015年には安保法の強行採決に対し「小さな声をあげよう」という運動を行った。2016年から「東山つながりキッチン」という子ども食堂兼地域づくりの活動を行っており、昨年は子どもの権利条約の岡山からのカウンターレポートづくりに関わり、現在岡山の人や岡山の子どもの現状を知ってもらう冊子を作成中。

《第二部登壇者》

広木敬子（ひろき けいこ）横浜市立永田台小学校 主幹教諭

横浜市で教員を続けており、5年前に永田台小学校に着任、ユネスコスクール、ESDに出会う。現在は教務主任・学級担任として、学校デザイン、授業改善、校内研究・研修に「働き方改革」の視点で取り組んでいる。以前から「主体的な学び手の育成」「ファシリテーション」に興味をもち学び続けてきたところ、ESDに出会うことでより視野が広がる。最近の印象的な実践は、学校近くの空き店舗を活用した「つながり祭」の立ち上げと継続。互いをケアし合い、意識を少し変えるだけで、学校は元気になり、子どもを取り巻く地域の方々ともっとつながっていけると実感している。子どもの未来のために「元気な学校づくり」に取り組んでいきたい。



《第二部コメンテーター》

黒田 友紀（くろだ ゆき）日本大学 准教授



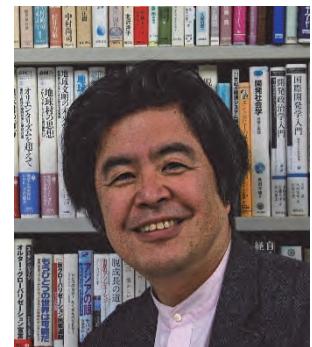
東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化専攻博士課程単位取得退学。日本大学・慶應義塾大学非常勤講師、静岡大学教育学部講師を経て現職。専門は、学校教育学、教育方法・評価。とくに日米の公立学校改革、ジェンダーと教育の研究を行っている。小中学校の現場に学びながら、すべての子どもに質の高い学びを保障するための授業・学校改善の研究と学校支援を行っている。著書に、『教育の今とこれからを読み解く 57 の視点』（教育出版、2016 年、編著）、『教師の声を聴く 教師のジェンダー研究からフェミニズム教育学へ』（学文社、2016 年、共著）、『これからの学校教育を担う教師を目指す—思考力・実践力アップのための基本的な考え方とキーワード』（学事出版、2016 年、分担執筆）、『グローバル時代の学校教育』（三恵社、2013 年、編著）、『アメリカ教育改革の最前線』（学術出版会、2012 年、分担執筆）。

第三部：持続可能な開発／SDGs と ESD

《第三部コーディネーター》

湯本浩之（ゆもと ひろゆき）宇都宮大学 教授／NPO 法人開発教育協会 副代表理事

上智大学文学部英文学科卒業後、在中央アフリカ共和国日本大使館に在外公館派遣員として2年間在勤。帰国後、NGO 活動推進センター（現在の（NPO）国際協力 NGO センター）事務局次長や開発教育協議会（現在の（NPO）開発教育協会）事務局長、立教大学文学部特任准教授を経て現職。現在は、NPO 法人開発教育協会副代表理事、日本 ESD 学会理事も務める。研究領域は、国際教育論、国際開発論、市民組織論。これまで NGO 活動や開発教育の普及推進に関わる一方、NGO・NPO、学校・大学、自治体・教育委員会、政府機関等が主催する講座や研修会で講師やファシリテーターを務めている。ESD 関連の著作に『グローバル時代の「開発」を考える：世界と関わり、共に生きるための7つのヒント』（共編著、明石書店、2017）、『SDGs と開発教育：持続可能な開発目標のための学び』（共編著、学文社、2016）、『グローバル・ティーチャーの理論と実践：英国の大学と NGO による開発教育の試み』（共監訳、明石書店、2011）などがある。



《第三部登壇者》

河野晋也（こうの しんや）国立大学法人奈良教育大学附属小学校 教諭／ESD 日本ユース



奈良県立小学校教員を10年間務めた後、4月より現職。現在、近畿 ESD コンソーシアム運営委員、日本 ESD 学会事務局員、奈良県小学校教科等研究会社会科部会主題研究部副部長を務める。近畿 ESD コンソーシアムでは、市内の現職教員や学生、大学教員らとともに ESD の理論研究、教材開発を行っている。主に、総合的な学習の時間や社会科において、奈良市の地域教材（歴史文化遺産）を活用した ESD 授業実践の開発、構成主義的学習論に基づく児童生徒の学び合いを深めるアプローチについて研究を進めている。フルブライト・ジャパンによる日米教員交流、ACCU による日韓教員交流事業、第4回ユース・カンファレンスに参加。

《第三部登壇者》

長澤恵美子（ながさわ えみこ）一般社団法人日本経済団体連合会 教育・CSR本部 統括主幹

1983年、経団連事務局入局。96年から企業の社会貢献活動の推進を担当。03年からは企業の社会的責任（CSR）の推進も担当し、ISOにおける社会的責任の国際規格（ISO26000）策定に参加する経済界代表をサポート。09年研修や出版などの事業を行う経団連事業サービスに出向し、企業のリーダー養成講座などを運営。17年4月から現職。経団連では、2017年11月に「Society 5.0の実現を通じたSDGsの達成」を柱に企業行動憲章を改定。その改定作業を担当。



《第三部登壇者》

三隅佳子（みすみ よしこ）北九州ESD協議会（RCE北九州）顧問
／認定NPO法人国連ウイメン日本協会 副理事長・北九州会長



公立小・中学校教員を経てPTAや小・中学校母の会活動に携わる。一方で短大非常勤講師を務める。1982年北九州市広報室広聴課長として民間登用。1983年婦人対策室長。1990年女性行政推進部長。同年ふるさと創生事業アジア女性交流・研究フォーラム（KFAW）を設立専務理事。1995年市立男女共同参画センター所長。2001年（公財）KFAW理事長。2006年同会長、現在評議員。並行して認定NPO法人国連ウイメン日本協会の副理事長・北九州会長を務める。ESDとの関わりは2002年のヨハネスブルクサミット参加以来の課題として2006年9月産学官民連携による「北九州ESD協議会」（RCE北九州）を設立。副代表兼運営委員長として、ESD活動を推進してきた。また、ESD-J理事として九州各県のネットワークの構築に努めた。日本ESD学会の評議員となる。

《第三部コメンテーター》

見上一幸（みかみ かずゆき）国立大学法人宮城教育大学 学長／日本ESD学会 副会長

専門研究は単細胞生物を使った発生遺伝学（東北大学 理学博士）で、宮城教育大学では理科教育と環境教育を担当した。環境教育実践研究センター長、附属小学校長、学長特別補佐、副学長を経て平成24年から宮城教育大学学長となる。環境教育では水中の微小生物を中心に水質環境にかかわる実践研究を行ったが、ユネスコ国内委員会、環境省、国連大学などの機関と関わり中でESDに深く関わるようになる。附属小学校長の時代に韓国のASPnet活動を知り興味をもったところ、木曽国際統括官から国内のASPnet活動とESDの推進に協力を依頼される。そこで宮城教育大学附属小学校と同大学がユネスコスクールに加盟する。その後、宮城方式とも言われた“大学と学校との連携”で気仙沼市を中心に次々に学校がASPnetに加盟し、さらにその波は広がった。ユネスコスクール（ASPnet）を支援する大学間ネットワーク（ASPUnivNet）の設立にも努力するとともに、日本ユネスコ国内委員会委員としてもESDの推進に関わらせていただく。中央教育審議会の専門委員としても関わらせていただいたことから、ESDが新学習指導要領の前文に示されたことを喜ばしく思う。



総括

《総括》

岩本 渉（いわもと わたる）アジア太平洋無形文化遺産研究センター 所長



1954 年生まれ。パリ第 2 大学にて行政学 D.E.A（修士）取得。1977 年文部省入省。国際学術課長、専門教育課長、学術課長等を歴任後、2001 年から 2009 年までユネスコ本部に勤務し、その間、教育局中等・職業技術教育部長、人文社会科学局社会科学政策・研究部長を務める。帰国後、東北大学特任教授を務めた後、文部科学省国際交渉分析官、参与として ESD に関するユネスコ世界会議を担当するとともに、ユネスコ総会、執行委員会に数次参加。退官後も 2015 年の COP21 におけるフランス政府主催のサイドイベントで日本の ESD について報告等を行う。現在、国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター所長として、アジア太平洋地域における無

形文化遺産の保護に関する研究の促進を図るとともに、中部大学客員教授、日本 ESD 学会理事評議員を務める。

主催者挨拶

《主催者》

小澤紀美子（こざわ きみこ）日本 ESD 学会 副会長／東京学芸大学 名誉教授

（株）日立製作所システム開発研究所研究員を経て、東京学芸大学・同大学院研究科教授。現在は東京学芸大学名誉教授、こども環境学会理事。専門分野は環境教育学。中央教育審議会委員、中央環境審議会委員、社会資本整備審議会委員などを歴任し、環境省主催の EE・ESD カリキュラム・デザイン研修などにかかわる。さらに日本学術会議環境学委員会 20 期、21 期環境思想・環境教育分科会委員長として「学校教育・高等教育における環境教育の充実に向けて」を提言。編著書は『これからの環境学習—まちはこどものワンダーランド』（風土社）、『子どもの・若者の参画』（萌文社）、『持続可能な社会を創る環境教育論』（東海大学出版社）など。



《主催者》

手島利夫（てじま としお）江東区立八名川小学校 校長／日本 ESD 学会 副会長



2005 年、江東区立東雲小学校校長就任。2006 年、同校がユネスコ協同学校として認定を受け、ESD の研究を開始。2010 年、江東区立八名川小学校校長就任。2011 年、同校がユネスコスクールとして認定される。ESD 円卓会議委員、ユネスコ国内委員会ユネスコスクールガイドライン検討委員会委員、同委員会教育小委員会外部有識者など歴任。2013 年、ユネスコスクール全国大会第 4 回 ESD 大賞受賞。第 44 回博報賞受賞。2014 年ユネスコ ESD 世界会合にて ESD カレンダーを発信。2017 年ジャパン SDGs アワード特別賞受賞。著書に「未来をつくる教育のすすめ」（日本標準・2008）、「学校発・ESD の学び」（教育出版・2017）など。

－持続可能な開発目標(SDGs)－



図 1: 持続可能な開発目標 (2016-2030)

－SDG4(教育)とターゲット(抜粋)－

目標 4. すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する

4.1 2030 年までに、すべての子どもが男女の区別なく、適切かつ効果的な学習成果をもたらす、無償かつ公正で質の高い初等教育及び中等教育を修了できるようにする。

4.2 2030 年までに、すべての子どもが男女の区別なく、質の高い乳幼児の発達・ケア及び就学前教育にアクセスすることにより、初等教育を受ける準備が整うようにする。

4.3 2030 年までに、すべての人々が男女の区別なく、手の届く質の高い技術教育・職業教育及び大学を含む高等教育への平等なアクセスを得られるようにする。

4.4 2030 年までに、技術的・職業的スキルなど、雇用、働きがいのある人間らしい仕事及び起業に必要な技能を備えた若者と成人の割合を大幅に増加させる。

4.5 2030 年までに、教育におけるジェンダー格差を無くし、障害者、先住民及び脆弱な立場にある子どもなど、脆弱層があらゆるレベルの教育や職業訓練に平等にアクセスできるようにする。

4.6 2030 年までに、すべての若者及び大多数(男女ともに)の成人が、読み書き能力及び基本的計算能力を身に付けられるようにする。

4.7 2030 年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。

4.a 子ども、障害及びジェンダーに配慮した教育施設を構築・改良し、すべての人々に安全で非暴力的、包摂的、効果的な学習環境を提供できるようにする。

4.b 2020 年までに、開発途上国、特に後発開発途上国及び小島嶼開発途上国、ならびにアフリカ諸国を対象とした、職業訓練、情報通信技術(ICT)、技術・工学・科学プログラムなど、先進国及びその他の開発途上国における高等教育の奨学金の件数を全世界で大幅に増加させる。

4.c 2030 年までに、開発途上国、特に後発開発途上国及び小島嶼開発途上国における教員研修のための国際協力などを通じて、質の高い教員の数を大幅に増加させる。

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000101402.pdf> から抜粋

－日本 ESD 学会－

1. 「日本 ESD 学会」設立趣意書

今、私たちは生物多様性劣化や気候変動、貧困や地域格差、社会的不公正や人権侵害、難民や地域紛争などをはじめとする地球的諸課題に直面しています。これらの課題は地域の課題と密接につながっており、私たちの生活に多大な影響を及ぼしています。世界的には 1970 年頃から人類社会存亡の危機が意識されるようになり、1980 年代後半に持続可能な開発（SD：Sustainable Development）の概念が強調されました。さらに、1992 年の地球サミット（リオ・デ・ジャネイロ）と 2002 年のヨハネスブルグ・サミットを通じて、持続可能な社会を実現するために、現在社会を生きるおとな達と次世代の主人公となる子ども達を含めた持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）の重要性が強く認識されるようになりました。ヨハネスブルグ・サミットで提唱され、2005 年から始まった国連 ESD の 10 年（DESD）は、2014 年に日本で開催された最終年会合で幕を閉じましたが、その世界会議で開始が発表されたグローバル・アクション・プログラム（GAP）と、2000 年のミレニアム開発目標（MDGs）の後継として 2015 年の第 70 回国連総会で採択された持続可能な開発のための目標（SDGs）は、環境、経済、社会および文化を調和させた持続可能な社会の実現に向けたさらなる取り組みの方向性を示しました。持続可能な社会を実現するために ESD の重要性は増すばかりですが、ともすれば各人の立場と理念に基づく実践、政策アジェンダへの位置づけ等の活動が先行し、実践を深化させるための研究は関連する専門領域で個別に取り組まれているのが現状です。環境、経済、社会、文化などが相互に関係している SD の課題は複合的であり、従って ESD の研究も実践と結合した様々な専門領域の学際的・複合的研究であることが求められます。環境、国際理解、開発、人権、平和、学校、社会、各教科等の教育に関わる学協会において組織的、個人的に ESD 研究に携わっている研究者による協働を活性化させることによって、「学」としての ESD の方向性を探究すること、実践と結んだ情報交換と理論研究、実践への還元が必要です。ESD は世代を問わず、学校、市民、企業、行政など多様なステークホルダーが連携して、現代社会の課題を自らの問題としてとらえ、持続可能な社会を創造するための価値観や行動を生み出す変容の教育です。これを継続的に発展させるためには、活動の交流にとどまらず、ESD の担い手の育成、実践者の経験をベースにした研究の深化や研究成果を活かした実践が不可欠です。

私たちは、ESD の理論的・実践的研究、実践の情報交換等を行うことにより持続可能な社会の創造に貢献することを目的として、研究者、教育者、学生、市民がその立場や分野を越えて協働する「日本 ESD 学会」を設立することを呼びかけます。ESD を推進してきた皆様、ESD を実践している皆様、ESD に関わる研究者の皆様、そして、ESD に関心あるすべての皆様に、「日本 ESD 学会」にご参加いただきますようお願い申し上げます。

2016 年 12 月 18 日 「日本 ESD 学会」設立 呼びかけ人一同

2. 日本 ESD 学会設立総会を開催

ESD を研究・実践の中心に据えた学会の設立を望む声を受け、2017 年 4 月 29 日（土）に秋葉原コンベンションホールを会場に、「日本 ESD 学会設立総会」を挙行了いたしました。日本全国より、ESD を実践されている現職教員、ESD を推進されている自治体職員、実践されている NPO や NGO、企業、個人、さらに ESD を研究する研究者、143 名が一堂に集まり、熱気のある総会となりました。また、環境省からは総合環境政策局長の奥主喜美様、文部科学省からは国際統括官の川端和明様（鈴木則子様代読）のご祝辞を賜ったほか、日本 ESD 学会設立記念講演会として、第 8 代ユネスコ事務局長である松浦晃一郎様から「ESD に関する世界の動きと日本 ESD 学会に期待すること」と題したご講演をいただきました。記念講演会終了後の懇親会まで、ご参加いただいたみなさまの持続可能な社会づくりへの熱い思いと、日本 ESD 学会への期待を感じる一日となりました。



3. 日本 ESD 学会について

詳細は、学会ウェブサイト（<http://jsesd.xsrv.jp/>）をご覧ください。

ー「SDGs と ESD」特別企画シンポジウム会場案内ー



国連大学 ウ・タント国際会議場（3F）

受付・レセプションホール（2F）

〒150-8925 東京都渋谷区神宮前 5-53-70

〔電車〕

- ・東京メトロ 表参道駅「B2」出口より徒歩約7分
- ・JR 山手線、東急線、京王井の頭線渋谷駅 宮益坂方面出口より徒歩約10分

〔バス〕

- ・都バス 88系（JR 渋谷駅-JR 新橋駅北口）青山学院バス停下車

※ウ・タント国際会議場ならびにロビー等は、原則飲食禁止です。

※国連大学本部には駐車場はございません。当日ご来場の際には公共交通機関を利用下さい。

MEMO



この印刷物は環境に配慮し、FSC®森林認証紙と、地産地消・輸送マイレージに配慮したライスインキを使用し、印刷はアルカリ性現像廃液を出さず、イソプロピルアルコールなどを含む湿し水が不要な水なし印刷方式を採用しています。